

# 尾崎横穴群発掘調査報告書

1988年1月

島根県佐田町教育委員会

# 尾崎横穴群発掘調査報告書



第1図 佐田町位置図

1988年1月

島根県佐田町教育委員会

## 序

本町には今までの調査によると、横穴群が5地域にわたって点在していることが知られている。

この尾崎坂の横穴群は、特に古くから知られていた。

町史によると、明治の中ごろに県道の新設工事の時点で、発見されていたようであるが、当時は、この横穴が古代の墳墓であるという認識はなかったようで、資料、遺物は現存せず、また、それを伝える古老も今はいない。

このたびの県道湖陵・掛合線の改良工事によって、今まで知られていなかった部分が、再び関の目をみることになった。

地域開発によって、遺跡が姿を消してゆくことは、保存する立場としては誠に残念なことであるが、綿密な発掘調査によって、『出雲国風土記』が伝える「飯石郡須佐郷」の古代史をひもとく新たな知見が得られれば、その意義も大いなるものがあると期待したのである。

2か年にわたる調査によって、身近に古代の葬送儀礼の一端を垣間みることができたが、墳墓の造営にあたった古代人の労苦のあとをしのぶとき、人々の死の悼みは、時代を問わず尊厳であるべきことに大きな感動を覚えるものである。

この調査は、単なる調査に終わることなく、本町並びに出雲地方における古代史に貴重な資料が加えられたものとして、今後この成果を有意義に活用しなければならぬと思う。また遺跡保存についても、その事の重大さを改めて認識した次第である。

調査にあたっては、町教育委員会だけでは充分な対応が整わず、島根県教育委員会文化課をはじめ、各諸先生方に格別のご援助を仰ぎ、無事完了したことを感謝し、また、工事関係者、作業員各位のご労苦に対し、深甚な謝意を表します。

昭和63年1月

島根県佐田町教育委員会

教育長 佐 貫 光 弘

## 例 言

1. 本書は、島根県瓊川郡佐田町大字宮内、尾崎地区の県道、崩壊・掛合線の改良工事にもなる「尾崎横穴群」の発掘調査の記録である。
2. 調査は佐田町教育委員会が主体となり、島根県教育委員会文化課及び関係各機関の協力を得て、昭和61年度、昭和62年度の2か年にわたって調査したものである。
3. 調査は次のような組織構成でおこなった。

調査員 勝部 昭（島根県安来市立第一中学校教諭・昭和61年度調査時）  
速岡法暉（島根県八雲村立八雲中学校教頭・昭和62年度調査時）  
田中迪亮（佐田町文化財調査委員）

調査指導者 宮沢明久（島根県教育委員会文化課埋蔵文化財第一係長）  
卜部吉博（島根県教育委員会文化課文化財保護主事）  
西尾克己（島根県教育委員会文化課主事）  
杉原清一（島根県文化財保護指導委員）  
大園晴雄（大田市教育委員会主任主事）

調査補助員 山崎順子、藤原友子  
調査作業員 板垣新一、板垣藤雄、板垣貞治、加藤茂生、対島 守、日高 稔  
及び協力者 柳岩崎建設、柳大幸建設、柳神戸川測量、大谷昌武  
佐々木敬志（佐田町文化財調査委員）

事務局 石崎 勉（佐田町教育委員会教育次長）  
栗原 豊（佐田町教育委員会社会教育係長）  
黒崎勇登（佐田町教育委員会社会教育主事・昭和61年度調査時）  
三島勝美（佐田町教育委員会社会教育主事・昭和62年度調査時）

4. 本調査の期間は次のとおりである。

第1次 昭和61年 9月19日～10月24日（第Ⅰ群及び第Ⅲ群）

第2次 昭和61年 11月26日～12月10日（第Ⅱ群）

第3次 昭和62年 6月 1日～ 6月20日（第Ⅱ群及び第Ⅳ群）

5. 本書は調査指導者の指導・助言を得、田中が勝部・速岡と協議して編集・執筆をし、栗原・山崎がこれをたすけた。
6. 図面の方位は、すべて調査時の磁北である。縮尺は一様ではない。
7. 出土遺物は、現在、佐田町教育委員会で保管している。

# 目 次

序	文
例	言

## 本 文 目 次

I	調査にいたる経過	1
II	位置と地理的環境	3
III	周辺の遺跡と歴史的環境	4
IV	尾崎横穴群の概要	7
	尾崎横穴群一覧表	9
	第I群横穴	7
	第II群横穴	34
	第III群横穴	48
	第IV群横穴	48
	小 結	53
	出土土器一覧表	55
V	稜線上の墳丘	60
	小 結	63

## 挿 入 図 面 目 次

図-1	佐田町位置図	中表紙
図-2	尾崎横穴群周辺遺跡分布図	2
図-3	尾崎横穴群周辺地形図	6
図-4	尾崎横穴群分布図	8
図-5	第I群1号穴実測図	11
図-6	1号穴出土遺物実測図	12
図-7	2号穴実測図	14

图-8	2号穴出土遺物実測図	15
图-9	2号穴出土遺物実測図	16
图-10	4号穴出土遺物実測図	16
图-11	3号穴実測図	18
图-12	4号穴実測図	20
图-13	5号穴実測図	23
图-14	5号穴出土遺物実測図	24
图-15	6号穴実測図	27
图-16	6号穴出土遺物実測図	28
图-17	8号穴実測図	31
图-18	8号穴出土遺物実測図	32
图-19	8号穴出土遺物実測図	33
图-20	第Ⅱ群1号穴出土遺物実測図	35
图-21	1号穴実測図	36
图-22	2号穴実測図	38
图-23	3号穴実測図	40
图-24	2号穴出土遺物実測図	41
图-25	3号穴出土遺物実測図	41
图-26	4号穴実測図	43
图-27	5号穴実測図	46
图-28	5号穴出土遺物実測図	47
图-29	第Ⅳ群3号穴実測図	49
图-30	4号穴実測図	50
图-31	5号穴実測図	51
图-32	6号穴実測図	52
图-33	尾崎横穴群第1墳丘遺構実測図	61
图-34	第3墳丘西側遺構実測図	62

## I 調査にいたる経過

尾崎横穴群は、島根県簸川郡佐田町大字宮内1,324番地（尾崎地内）に所在し、山腹を通る県道、湖陵・掛合線が山腹を貫通する沿道の上下斜面に展開しており、一部の横穴は既に開口していた周知の遺跡である。（島根県遺跡地図1・佐田a2）

この県道の改良については、現道に沿う改良には地形的な制約があり、冬期間の交通確保の上からも抜本的な見直しが求められていたのであるが、近年、その計画が具体化し、逐次、局部的な改良が進められてきたのである。

計画案によると、佐田町大字宮内地内から掛合町との境界付近にいたる間は新設路線となり、その方線は尾崎地内で現道に直交する立体交差となり、その直近では現道から新道に進入する取付道路が新設される、というもので、尾崎横穴群周辺の地形は大きく様が変わることとなった。

昭和61年7月に出雲土木建築事務所からこの計画が示された時点で、文化財保護行政側は、この横穴群が、町内でも有数の規模と内容を備えていることから、この横穴群を保護すべく、方線の変更を強く要請したのであるが、既に関係地区の用地買収等も完了していることから、計画方線はもはや動かし難い状況となっていた。

そこで佐田町教育委員会は、緊急調査の必要に迫られたのであるが、調査態勢について十分な対応ができず、関係機関との度重なる協議の結果、島根県教育委員会文化課をはじめ、各機関の格別の援助を得ることとなった。

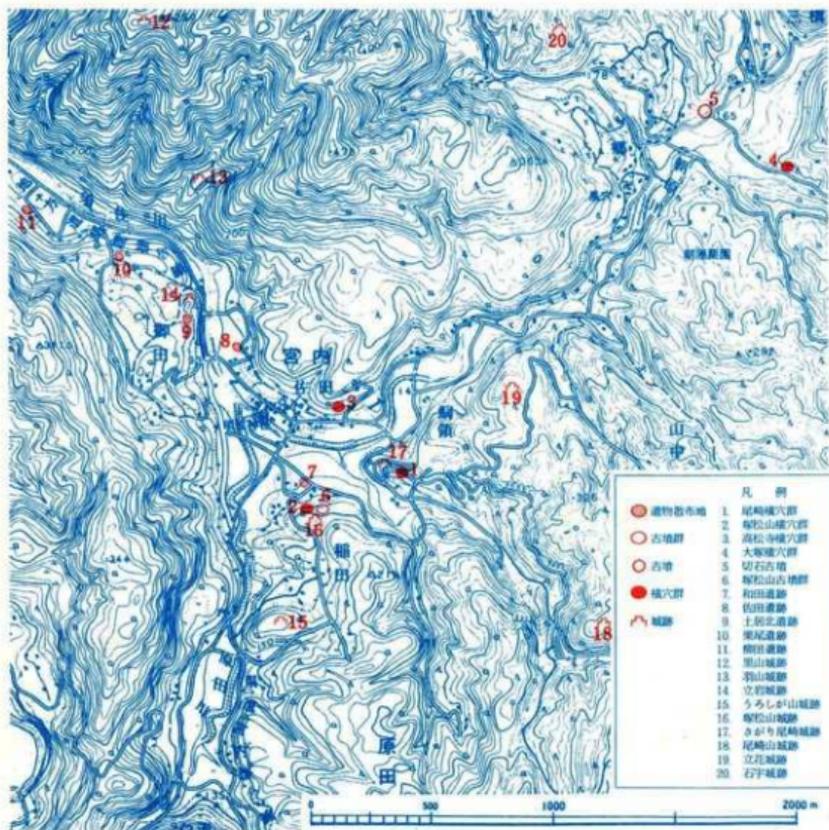
調査に先立って島根県教育委員会文化課、出雲土木建築事務所、佐田町教育委員会の三者は昭和61年8月25日から9月24日までの間、現地及び島根県教育委員会文化課において遺跡を包蔵する工事区域の取扱いを協議し、出雲土木建築事務所長と佐田町教育委員会教育長との間に工事にかかる発掘調査委託契約を締結して調査を開始した。

調査にあたって、工事対象区域を4文群に分割し、I群とII群を第一次の調査区域として昭和61年9月19日から着手し、10月24日に終了した。

III群は昭和61年11月25日から着手し、12月10日に終了した。

IV群は工事年度に対応して昭和62年6月1日から着手して6月20日に終了した。





第2図 尾崎横穴群周辺遺跡分布図

## Ⅱ 位置と地理的環境

佐田町は島根県東部の簸川郡の南端にあり、中国山地の脊梁部と日本海沿岸との中間の位置にある。町内の海拔高度は、最高地は南端の羽幸大山(727 m)、最低地は佐田町役場付近の70 mである。

町内を南北に貫流する神戸川は島根県の主要河川の一つで、それに合流する支流には伊佐川、高津屋川、波多川、須佐川がある。

遺跡所在地である大字宮内は佐田町の東端部にあり、東須佐地区と呼ばれる大字原田、大字朝原の三大字の中心地となっている。

周辺の地形は、85パーセントを山林でしめる佐田町の中では、やや広い沖積平野と台地をもつ小盆地で、沖積地の標高は上流部で120 m、下流部で90 mの高度をもち、北西部の黒山(526 m)をのぞいて300 m級の山地に囲まれている。

沖積地は神戸川の支流となる朝原川、原田川が宮内地内で合流して須佐川となるが、この河川の各水系によって形成されたものである。農耕地、居住地は発達した段丘と、地すべり等によって形成された台地と斜面に展開している。

尾崎横穴群の位置は、宮内地区東部の山岳部から西に突出する支尾根の先端部にあるが、この地形は浸食にとり残された高地である。

周辺の地質は、山陰地方の地質層序で呼称されている川合層と、久利層に属する海成積成層で、生成された時期は新生代の第三紀、中新世のころである。

東側の山岳部は、中新世初期の火山活動による火山岩類(主として石英安山岩)によって形成されている。

海成積成層(砂岩・泥岩)の下位には火山岩の貫入がみられるが、これは黒山を形成した中新世終期の火山活動による岩帯の一部(流紋岩)である。

尾崎地区をはじめ、町内で横穴群が展開する地域は、高松寺横穴群(宮内)、塚松山横穴群(原田)、大家横穴群(朝原)であるが、各横穴群所在地の地質条件は、いずれも砂岩が優勢な分布となっている地域である。

この岩質は、他の岩石に比較して、掘削、加工が容易であることから横穴が多く造営されたものと思われる。しかし砂岩と泥岩が互層となる部分は、水分の通路になりやすいことから、剝離しやすいという特性がある。

### Ⅲ 周辺の遺跡と歴史的環境

#### 古 代

尾崎横穴群周辺には、宮内盆地を中心にして隣接する原田、朝原地区に古墳時代後期に造営された横穴群、古墳群が点在している。

横穴群、古墳群は、いずれも古くから開口しているものが多く、遺物出土の詳細は不明である。

古墳時代以前にさかのぼる遺跡は、宮内・原田地内で石器、土器片が散発的に出土しているが、遺跡の実態は定かではない。

遺物散布地からの出土品をあげてみると、磨製石斧（始刃）が和田遺跡（原田）と佐田・藤田遺跡（宮内）で各1個、打製石鏃が栗尾遺跡（宮内）から1個、古式土師器片が稲田遺跡（原田）から数片、出土している。

墳丘をもつ古墳の塚松山古墳群に6基の箱式石棺が露出しており、丘陵の斜面には3基の横穴が開口していた。（注1）

この古墳群では昭和61年の詳細分布調査によって新たに4基の墳丘が確認された。（注2）塚松山に近い万行寺には石室をもつものと推定される万行寺古墳や和田古墳がある。

朝原地区の切石古墳は、墳丘は消滅しているが小型の石室がほぼ原形をとどめている。

同地区の原山古墳群は61年の調査によって3基の古墳が発見されたが、各古墳群の所在地よりほど遠くない位置に横穴群が展開している。

律令時代には、この地域を出雲国飯石郡須佐郷と称し「出雲國風土記」は、

「須佐郷・郡家の正西一十九里なり。神須佐能我命の詔りたまひしく「此の国は小さき国なれども國処なり。故、我が御名は木石に著けじ」と詔りたまひて即て己命の御魂を鎮め置き給ひき。故、須佐と云ふ。即ち正倉あり」

と記している。

「風土記抄」(注3)は

「宮内を以って郷標となす。即ち大宮大明神の社有り。是れ神須佐乃烏命の神社なり」として、郷庁がこの神社の近くにあったものと推定している。

「出雲國風土記」に記載する郡家は、飯石郡掛合町大字郡（こうり）と推定されている。

宮内地区内で、郷庁・正倉の位置は確認されていないが、宮内を中心とする地域が、古代から経済、文化及び軍事的な要衝の地であったことは、遺跡・遺物の分布密度からみて考えられているところである。

#### 中 世

中世の遺跡は、須佐神社を中心として、城砦跡と古墓群がある。

須佐神社は鎌倉末期、元徳2年（1320）の神社古図をみると本殿は現在の四倍の規模で、木地仏の薬師如来を安置する薬師堂のほか、塔、鐘樓等を配置した豪壮な社殿となっている。

本殿の柱銘によると、天文23年(1553年) 尼子晴久の旗下、本庄常光の手によって改修がなされているが、この時期、戦費がかさむため、本殿の古木を削りなおしたり、切り縮めるなど、用材を再利用したために現状の大きさに縮小されたものと考えられている。

現在みる本殿は大正4年に修理されたものである。

古墓群は、大平古墓群(宮内)と塚松山古墓群(原田)がある。塚松山古墓群は山上の削平地の地下に埋没していたもので、宝篋印塔、五輪塔が破却された状態で集中しており、約50基が数えられる。

城跡は宮内地区の一地点に立って見回しただけで、黒山城跡、羽山城跡、立岩城跡、塚松山城跡、うろしが山(源生山)城跡、立花城跡、尾崎山城跡、さがり尾崎城跡などが一望できる。(注4)

これらの山城は、同一時期に営まれたものではなく、山城築城の初期といわれる南北朝期の天險至上主義の、単純で粗放なものから戦国時代末期の複雑な構造をそなえているものまで、さまざまな時代相と個性をのぞかせている。

## 近 世

近世の遺跡は「たたら跡」が多い。

『山雲岡風土記』の時代から、この地方では砂鉄を原料とした鉄生産が行われていたことは知られているが、今までのところ、東須佐地区だけで約20か所の鉄生産遺跡が発見されている。生砥遺跡のほかに、寺跡、祭祀跡と、それともなう石造物も多い。

この中には、製鉄集団に祭られた「金屋子神」、山に働く人や牛馬の安全を祈った「山ノ神」がある。古い街道沿いの崖の上や路傍には「六地藏」「馬頭観音」をはじめ、多種にわたる石仏が点在する。

また、民衆の中から自然発生的に生まれ、受け継がれてきた民間信仰ともなうものもある。特殊なものとして、村の境界には必ず祭られていた「オノ神」や、山地と人里との境界に祭られた「ミサキ神」がある。

町内の代表的な高山の山頂部には、千ばつの年に、地域の農民が村をあげて降雨を祈った「雨乞い」の祭りの祭祀遺物がのこされているのも、この地方の特色である。

『雲陽誌』(注5)は、宮内には「11ヶ所の社堂」があると記している。

社堂のほかに、多くの石塔や石碑などが作られたのは、近世末期であろう。

村の中に浸透した信仰が、今日でも地域の伝統行事として受け継がれていることは、民衆と信仰の結びつきが、近隣社会の形成に強いかわりをもっていたことを示しているといえよう。

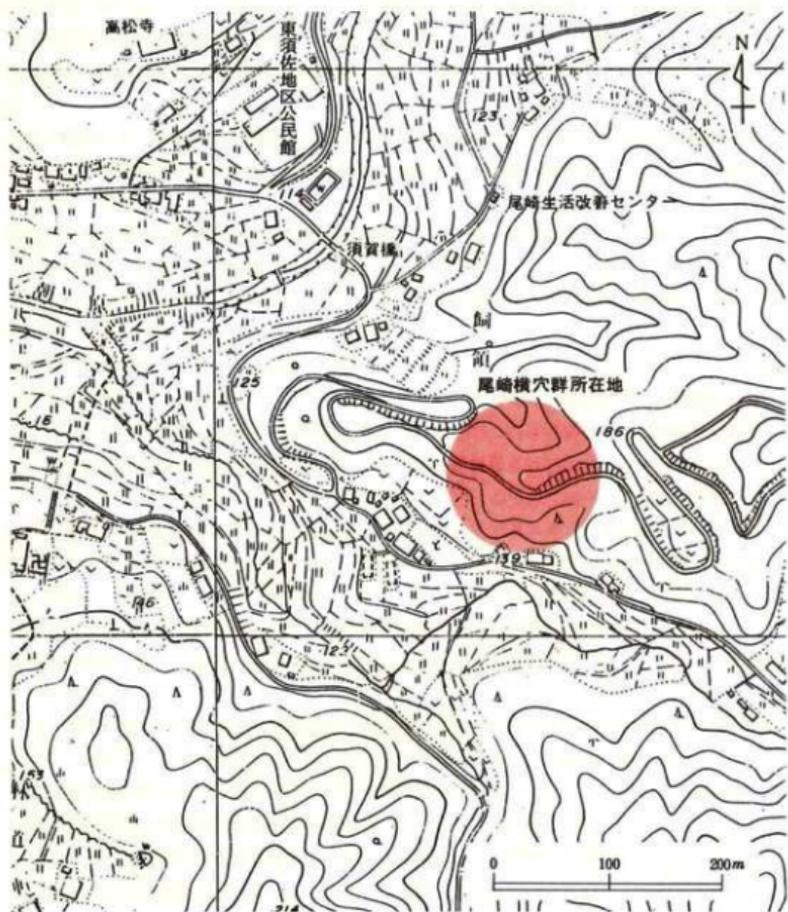
注1. 佐田町教育委員会「佐田町史・古墳時代」

2. 佐田町教育委員会「埋蔵文化財分布調査報告書・東須佐地区」

3. 出雲岡風土記の最初の注釈書、松江藩、岸崎左久次により1683年成立

4. 羽山、立花、尾崎山、さがり尾崎の各城は『出雲藩古知今図説』に所載

5. 黒沢長尚によって享保2年(1717)に成立した出雲の地誌



第3図 尾崎横穴群周辺地形図

## IV 尾崎横穴群の概要

尾崎横穴群は、佐田町東部の飯石郡掛合町との境界の、標高480 mの山岳部から西側の宮内に向けて峠状にのびる支尾根の先端部にある。稜線をへだてて、主として南側斜面に展開している。

尾根の最先端は、屈折する県道と、共同墓地のために原地形が失われている。もとは中世城郭のひな槽状の曲輪群があったものと推定される。

最上段の主郭部は「社日・大山神」の祭祀場となっているが、古記録によると、「さがり尾崎の城」と呼ばれた須佐高嶺城の枝城があったと伝えられ、現在も地名(小字)に「さがり」がこの近くに残っている。

横穴が展開する支尾根の稜線上には、約40 mの延長線上に3ヶ所の墳丘状の高まりがあり、当初は古墳群と考えられていたが、調査によって横穴群と関係するらしいものであることがわかった。

稜線の北側斜面には古くから開口している2基の横穴と、玄室全体が陥没した横穴1基のあわせて3基の横穴が確認されている。

横穴群の調査にあたっては、工事区域と、その工程期間に対応するため、調査地を4支群に分割して緊急を要する区域から、順次、調査を実施した。

## 第 I 群 横 穴

### 第 I 群 (昭和61年調査)

県道沿いの崖面に営まれた支群で開口している3基の横穴は以前から知られていた。

崖面一帯の表土のはぎ取りを行った結果、30 mの範囲に9基の横穴が確認された。

開口していた3穴は、当初の所見では羨道、あるいは玄室の一部と推定されているが、実際は、玄室全体が陥没し、露出していた部分は上部の剝落部の露頭であり、玄室の位置は開口部から3.0 mから4.0 m下部にあった。

9基の横穴は全体で約4.0 mの比高差があったが、ほぼ横一線にならび、各穴の間隔は極めて狭小なものであった。

確認された9基は西側から順次、1号穴、2号穴……と呼び9号穴までとしたが、7号、9号穴は道路下であり、工事区域外となるため、調査は実施しなかった。



## 尾崎横穴群一覽表

(單位 m)

支群	番号	玄				竈				道		開口方向	玄室平面形	玄室の天井形態	欄	高
		奥行	奥壁幅	玄室幅	最大幅	高さ	長さ	玄門幅	竈門幅	高さ						
I群	1	3.00	1.65	1.80	1.95	1.45	1.50	1.00	0.75	1.00		S	長方形	テノト		157.00
	2	2.70	1.60	2.00	2.10	1.10	1.25	0.90	0.60			S-15°-W	隅丸長方形	丸天井		157.50
	3	3.20	1.70	2.00	2.00	1.50		1.00				S-40°-W	隅丸長方形	丸天井		159.00
	4	3.30	1.80	2.10	2.10	1.10	1.10	1.00	0.85	1.00	0.85	S-40°-W	隅丸長方形	家形		157.30
	5	2.80	2.10	2.30	2.35	1.40	1.20	0.70	0.55	1.20	0.55	S-80°-W	長方形	丸天井		158.00
	6	2.90	1.90	2.00	2.10	1.30	1.90	0.90	0.70	0.95	0.70	S-40°-W	長方形	丸天井		158.30
II群	8	3.10	2.05	2.35	2.40	1.50	1.40	1.05	0.85	1.50	0.85	S-15°-W	長方形	丸天井		161.00
	1	2.50	1.35	1.25	1.35	1.10	1.40	0.90	0.50	0.90	0.50	S-20°-W	隅丸長方形	丸天井		149.15
	2	2.50	1.80	1.70	1.80	1.10	1.30	0.80	0.45	0.70	0.45	S-20°-W	長方形	丸天井		150.72
	3	2.00	1.30	1.35	1.45	1.10	0.80	0.80	0.60	0.90	0.60	S	隅丸長方形	丸天井		151.50
	4	2.80	1.60	2.00	2.00		2.05	1.65	0.75	1.20	0.75	S-30°-W	隅丸長方形	丸天井		152.70
	5	2.15	1.60	1.65	1.70	1.20	1.75	0.70	0.45	0.85	0.45	S	長方形	テノト		153.80
IV群	3	3.10	2.05	2.15	2.20	1.30		1.15				S	長方形	家形		164.00
	4												未完成の横穴			165.00
	5	2.20	1.40	1.60	1.70	1.10						S-35°-W	隅丸長方形	丸天井		165.65
	6	1.90	1.10	1.30	1.35	0.90						S-30°-W	長方形	丸天井		165.75

※ 門脇俊彦氏の分類では、テノト形は四柱式系三角形断面形妻入横穴 I A a、家形は四柱式系蓋正家形妻入横穴 I B a、丸天井形は丸天井系半球形横穴 II C にあたるとする。(「山陰地方横穴墓序説」『古文化談叢書 7 集』1980)

## 1号横穴

第1群の中では最西端の位置にあり、標高も最低位にある。

羨門は渠道に密着する状態で、羨道の床は道路面から1m下位にあった。

羨門の手前には閉塞石を受ける削り込みなどの構造は認められなかったが、これは過去の道路工事の際に消滅したものと推定された。

羨道から玄室にかけて、かなりの堆積土によって埋没していたが、外側からの流入土が多く、内部の崩壊土もある。

玄室の保存状態は側壁・天井部ともに良好で、掘削工程を示す工具痕も明瞭であった。

横穴の主軸は南北方向におき、南に開口していた。

玄室の形状は、中央部にややふくらみをもたせた縦長方形で、東側の隅角はやや丸みをおびているが、西側は直角になっている。

側壁はゆるやかに湾曲して立上る断面テント型で、奥壁上部はやや前方にせり出している。

棟線は一部に崩落はあるが明瞭であった。

規模は次のとおりである。

玄室——奥行 3.00 m 幅 1.90 m 高さ 1.40 m

羨道——長さ 1.50 m 幅 0.85 m 高さ 1.00 m

奥壁から羨門までの間は0.3mの比高差で前側に傾斜している。

排水溝は奥壁左端から右回りに側壁に沿って、羨道の中央まで導かれて消滅している。

玄室側壁にのこる工具痕は、刃先の痕跡、工具の動きから横穴の掘削、仕上げの過程で幅10～15cmのU字型の刃先をもつ鍬状の工具が使用されたものと推定された。

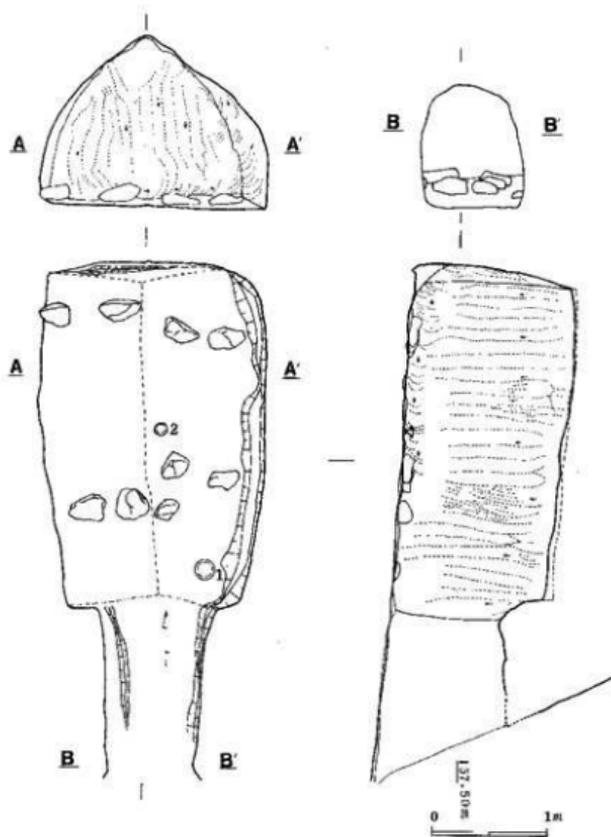
この横穴の遺物は、玄室奥側と入口側に並行に9個の川石が置かれていたが、これは棺座と推定できる位置にあり、複数の埋葬があったことをうかがわせる。

副葬品は玄室入口付近の右側に土師器の大形杯が1個、伏せた状態であり、玄室中央には小形の須恵器・高杯が1個置かれていた。それぞれについては次のとおりである。

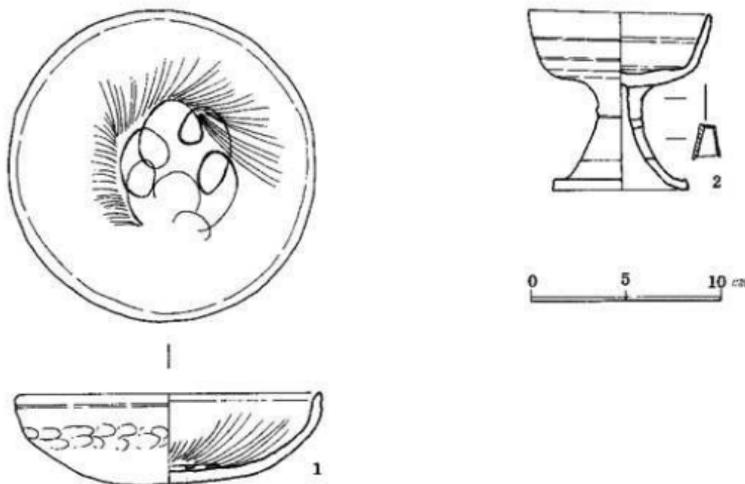
土師器・杯(第6図1) 口径16cmをはかる大形で、色調は赤褐色を呈する。底部はやや平坦で、ゆるやかな丸みをもって、浅く立上る。口唇部は外側に1条の弱い沈線を持ち、内側から外側に向かって、斜めに削り上げて端部を薄く丸みをもたせている。内側の中心部には、幅1mmほどのラセン状の暗文が認められ、その外側には放射状の暗文が1周する。調整は、底部の削り跡を丁寧にすり消し、体部は指頭による圧痕が、口縁近くまで全面に認められる。また一部に握りこぶし大の黒斑があり、細かいひび割れが生じているが、内面までは通っていない。胎土は砂粒を多く含む。

須恵器・高杯(第6図2) 小形の製品であるが、杯の底部は厚く、わずかに横の広がりをみせている。体部はやや外傾気味に立上る。1cmの間隔をもって2条の沈線が1周する。内面底部の中心は、やや凹みをもつがほぼ平坦面をもち、急角度でわずかに外傾しながら深みをもって立上がり、体部の中ほどでゆるやかな段をつけ、ふくらみをもって外に広がる。内外面とも自然釉がかかる。脚部は細長くハの字状に広がり、脚端部はわずかな平坦面をもって、先

端をはば垂直とする。上部に小さなかえりがつく。透孔は、上下2段のものが2方向にあり、  
 下段は鋭い切り込みをみせる台形をなし、上段は縦に裏側まで通る切り込みを施している。洞  
 窟は丁寧なナデ仕上げで、胎土は少量の砂粒を含む。



第5図 尾崎横穴群 第I群1号穴実測図



第6図 尾崎横穴群 第I群1号穴出土遺物実測図

## 2号横穴

1号穴の東側4.5mに位置する。既に開口していたと考えられていたが、開口部とみられた部分は実際は玄室・羨道の天井が全面にわたって陥没しており、横穴全体は崩落土で充填されていることが判明した。側壁の剥落も著しいものであったが、床面は安定しており、奥壁もほぼ原状が把握できた。

横穴の主軸はほぼ南北方向、S15°Wで南側に開口する。

玄室の平面形は兩丸縦長方形で、丸天井系の横穴と考えられ断面は半球形をなす。羨道は右端に寄せている。規模は次のとおりである。

玄室—奥行	2.70 m	幅	1.60～2.10 m	高さ	1.10 m
羨道—長さ	1.25 m	幅	0.60～0.90 m		
前庭—長さ	1.50 m				

玄室床面は比較的平らで、奥壁から羨門までの間は0.4mの比高差で前側が低くなっている。排水溝は、西側壁中央付近から右回りに側壁に沿って前庭部まで導かれている。羨門の閉塞部には幅7cm、深さ5cmの割り込みが設けられていた。

遺物は玄室入口付近に4個の川石が不規則におかれていたほか、玄室、前庭出土遺物の種類、数量は次のとおりである。

玄室—	刀子1、須恵器(壺4、坏3、高坏1、高台付埴1、埴1、平版1、長頸甕1)
前庭—	〔堆積土中〕須恵器(坏3分の2欠損)

壺(第8図4・6・10・11) 壺(6・10)は天井部から丸くカーブをえがき、口縁はわずかに内灣する。調整は体部を回転ナデで、壺(10)の天井部外面は荒く、ヘラおこし痕が残る。

胎土には細い砂粒が混入しており、やや粗い。(6・10)ともに内面は丁寧なナデで仕上げている。

蓋(6)はやや大形で「×」のヘラ記号をもつ。

蓋(4)は口唇部がやや内傾し胎土は緻密である。口縁部の器厚に比較して天井部は厚く、内側面ともに回転ナデで仕上げているが、天井部の外面にはヘラおこし痕が残る。「×」のヘラ記号をもつ。

蓋(11)は天井部中央に乳頭状のツマミと口縁部の内側にはかえりがつく。口縁は横になだらかにのびて端部は丸みをもち、内傾するかえりは鈍角に直線状に仕上げられている。調整はナデ仕上げで、天井部外面は丁寧なヘラ削りを施している。

坏(第8図5・7・9・14) 坏(5・9)の底部は、やや平らで口縁部は外開きに立上る(5)の口縁部はややふくらみ、受部はやや深い。調整は回転ナデを施し、底部にはヘラおこし痕が残る。「×」のヘラ記号をもつ。

坏(9)の胎土は、細い砂粒が混入してやや粗く、蓋(10)と同質の焼成であるがセットではない。調整は丁寧なナデ仕上げで、受部は浅く、内傾する立上りは短い。底部にはヘラおこし痕が残る、「×」のヘラ記号をもつ。

坏(7)の底部は丸く、ゆるやかな丸みで立上りながら、口縁部は外側に開く。口唇部はふくらみをもって丸く、受部は浅く、立上りは大きく内傾する。

坏は前底部の堆積土の中から出土し、3分の2が欠失していた。焼成時のひずみで器高は低く底部は平らになっている。内面は丁寧なナデ仕上げであるが、外面は荒いナデ仕上げで、受部は浅く、かえりは大きく内傾している。

高坏(第8図2) 坏の体部は深く、内湾しながら立上り、口縁部でわずかに外反する。脚部は太く、裾は大きく広がり、安定感をもたせる。2方向の台形の透孔は鋭く削り込まれており、切り口は坏の底部に通している。調整は丁寧なナデ仕上げである。脚部との接合痕が、わずかに認められる。

台付埴(第9図8) やや大形のもので、短く裾が広がった台に、体部は丸みをおびながら立上り、扱りをみせた肩口からわずかなふくらみをもって内傾する。頸部から口縁部まではやや外開きぎみに立上り、端部は丸みをもっている。調整は外面を丁寧なナデで、肩に2本の沈線をもつ。内部は荒いナデで仕上げている。

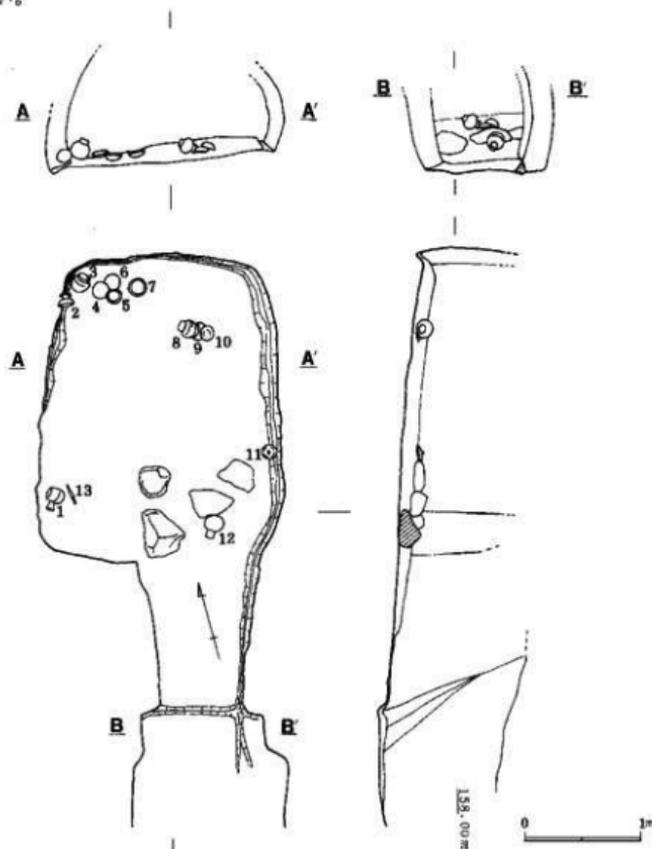
埴(第9図3) 底部から肩、頸部にかけて丸みをもって立上り、頸部は直立し、口唇部はわずかに内湾する。仕上げは丁寧なナデによるが、胎土に1~2mm大の砂粒を多く含んでおり、底面は回転時の砂粒の移動度が著しい。

平甗(第9図12) 底部から肩にかけて、ゆるやかな丸みをもって立上り、肩に張りがあるが頸部まで丸みをおびており、長円球状である。全体のつくりは薄く、胎土は緻密である。肩部に3本の細い沈線、胴体下部に凹線が一周しており、肩には2ヶ所に円形の粘土を貼り付けている。頸部の位置は偏心し、外開きに立上り、口縁の外側はやや内側にせはめている。

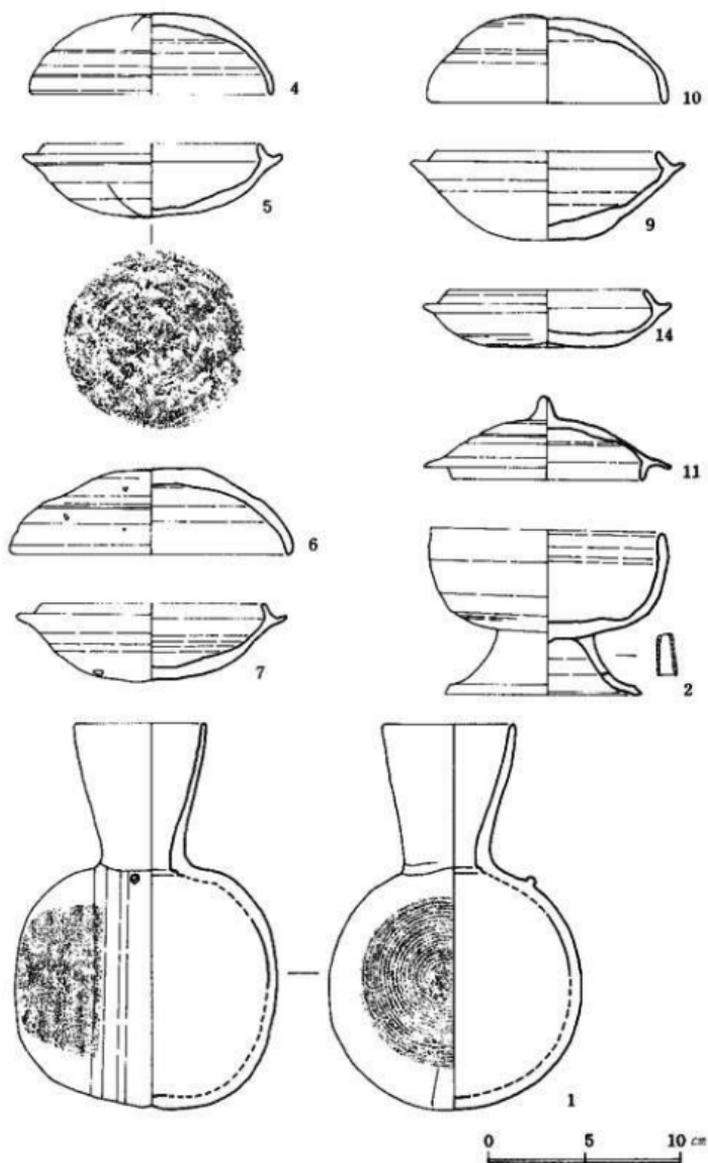
提瓶(第8図1) 体部は、横線を両側から圧縮した形となり、球形をなしている。面は胴

体の中央両側から同心円状のカキ目が全体にわたって施され、肩には円球状の浮紋が1個貼り付けられている。頸部の接合部は厚く、口縁部は外傾して立上るにしたがって薄くなり、外側を垂直に立上らせてまとめている。頸部の接合痕は内外ともに認められるが、全体が丁寧に仕上げられている。胎土はやや粗く、砂粒も多く混入している。全体の3分の2は自然釉の付着がみられる。

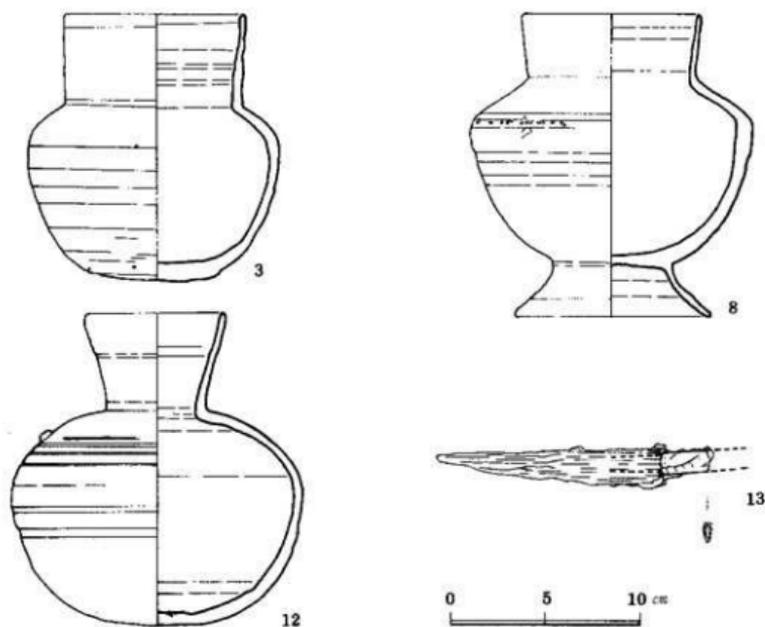
刀子(第9図13) 錆化と腐食が著しく、刃先は欠失して刀身は柄元から2.5cmだけを残している。刀身の元幅は1.2cmで、断面は平造りとなっている。柄は鹿角製とみられるが、柄頭の部分は腐食が進み、先端は鋭角状に残っている。長さは12cmをはかる。柄の外装は柄元の縁金具がない。



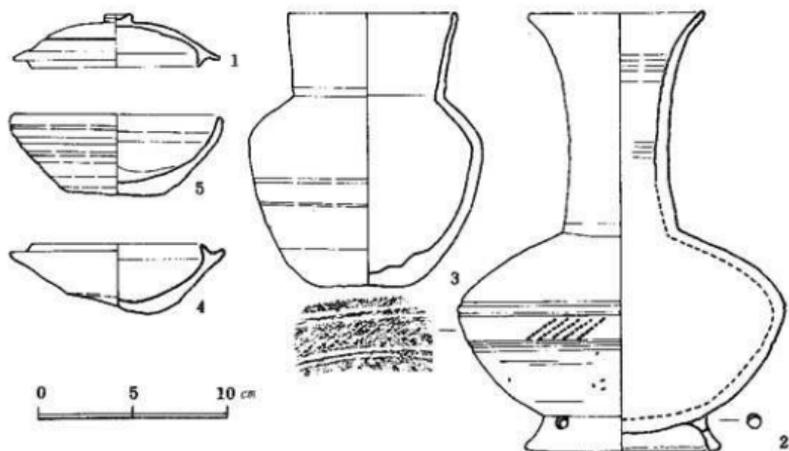
第7図 尾崎横穴群 第1群2号穴実測図



第8図 尾崎横穴群 第1群2号穴出土遺物実測図



第9图 尾崎横穴群 第I群2号穴出土遺物実測図



第10图 尾崎横穴群 第I群4号穴出土遺物実測図

### 3号横穴

2号穴から3mの間隔をおいた東側にある。昭和30年頃に開口して、通学途中の小学生が横穴に出入していたと伝えられている。

この横穴も2号穴と同様に天井部の全体が陥没し、崩落土で充填され、約4m上部の岩肌がのぞき、当初はその位置を開口部と推定していた。排土の結果、区民の話のとおり盗割されており、玄室には2個の川石だけが残されていた。

側壁面の剝落も激しく、残存する部分は僅かであったが、玄室の形状は識別できる状態であった。

横穴の主軸は北東方向において、S 40°Wで南西に開口する。

玄室の形状は、東側壁面をはほぼ直線状に掘削し、西側は外側に湾曲した隅丸の縦長方形で、羨道を右側に寄せている。天井は丸天井と推定でき、奥壁は上部が前側にせり出している。その規模は次のとおりである。

玄室——奥行 3.20 m 幅 2.00 m 高さ 1.50 m

羨道——長さ 不明 幅 0.70 m

羨道及び前庭は、過去の道路工事によるものか、欠失していた。

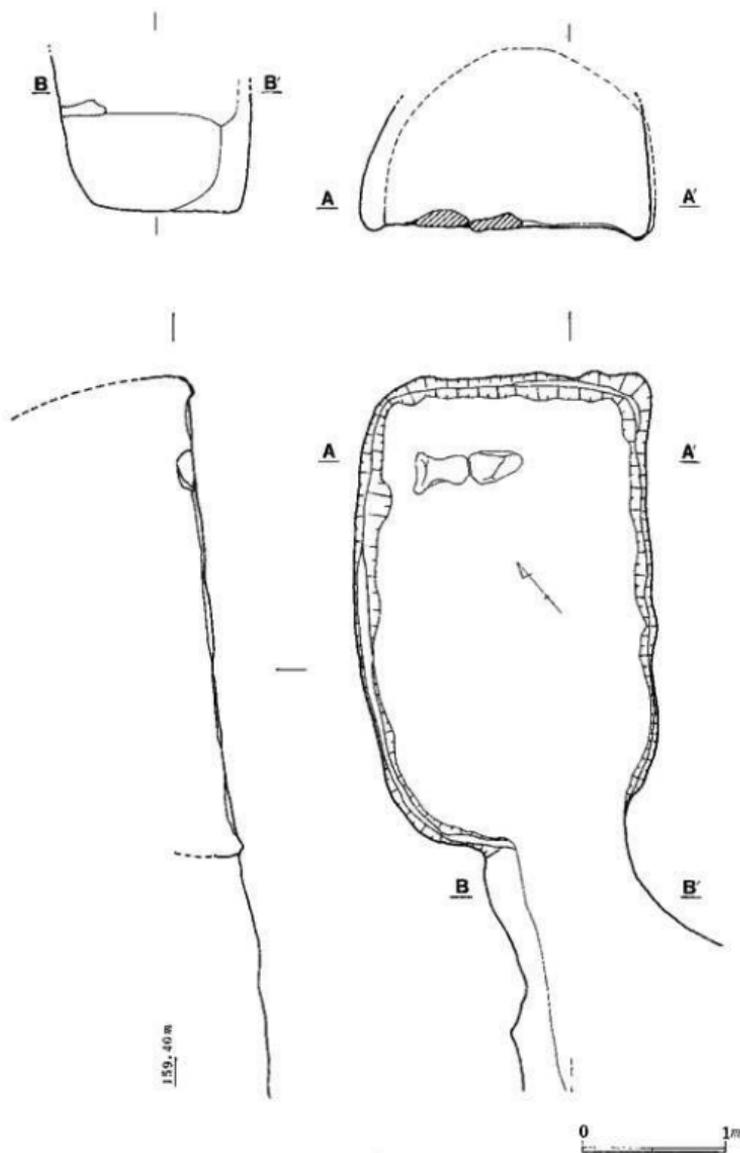
玄室床面も中央部から前側は、かなり荒廃していたが、奥部は安定していた。奥壁から玄門までの間は0.35mの比高差で前側に傾斜し、排水溝は側壁に沿って玄室の両側壁、奥壁の三方を回らせているが、東側は玄門付近で消滅し、西側は前庭部に導かれていた。

玄室奥に置かれた2個の川石は、棺座と推定できる位置にあった。

副葬品は検出されていない。



1号穴の明瞭な工具痕の実測図作成



第 11 图 尾崎横穴群 第 I 群 3 号穴实测图

#### 4号横穴

3号穴との間隔は2.5mで、床面は3号穴よりも1.3m低いレベルにある。

前庭から羨門、羨道は良く保存されていたが、玄室内部は天井、側壁ともに崩落が著しかった。内部の堆積土も大小のブロック状の崩落土のため層序の識別はできなかった。

玄室の平面プランは隅丸の縦長方形である。横穴の主軸はS40°Wで南西に開く。

玄室の側壁は剝落によって観察できない部分があるが、床より60～80cmの高さで明瞭な軒線が施されていた。天井は九天井型となり奥壁の上部は前側にせり出している。

側壁は軒線から上は剝落によって原形が失われており、奥壁の形状によって天井の構造を知ることができた。東側壁の下部は安定しており、この部分では工具痕が明瞭に観察された。

横穴の規模は次のとおりである。

玄室—奥行	3.30 m	幅	2.10 m	高さ	1.10 m
羨道—長さ	1.10 m	幅	0.70～1.00 m	高さ	1.10 m
前庭—長さ	1.50 m以上	(先端は道路によって欠損)	幅	1.10 m	

横穴全体の剝落に比較して床は平滑であった。奥壁から羨門までの間は0.6mの落差で傾斜し、羨門の閉塞部では15cmの段差で前庭部に続くが、閉塞のための削り込みは見られなかった。

排水溝は奥壁中央部からやや離れて両側に分かれているが、東側は規模が小さく、側壁に沿って玄門近くで消滅している。西側壁に沿う溝は、広く深くなっているが、これも玄門近くで消滅している。

玄室側壁にのこる工具痕は、幅が広いもので20cm、狭いものは5～3cmである。2種類以上のU字型の鋸状の工具によって仕上げられており、直線状に削られている軒線は、ノミ状の工具が使用されたものとみられる。

遺物は、玄室奥側と手前に並行して8個の川石が置かれていたが、これは棺座と推定できる位置になっている。

副葬品はすべて玄室内におかれ、器種、数量は次のとおりである。

須恵器(蓋1、坏2、台付長頸壺1、埴1)

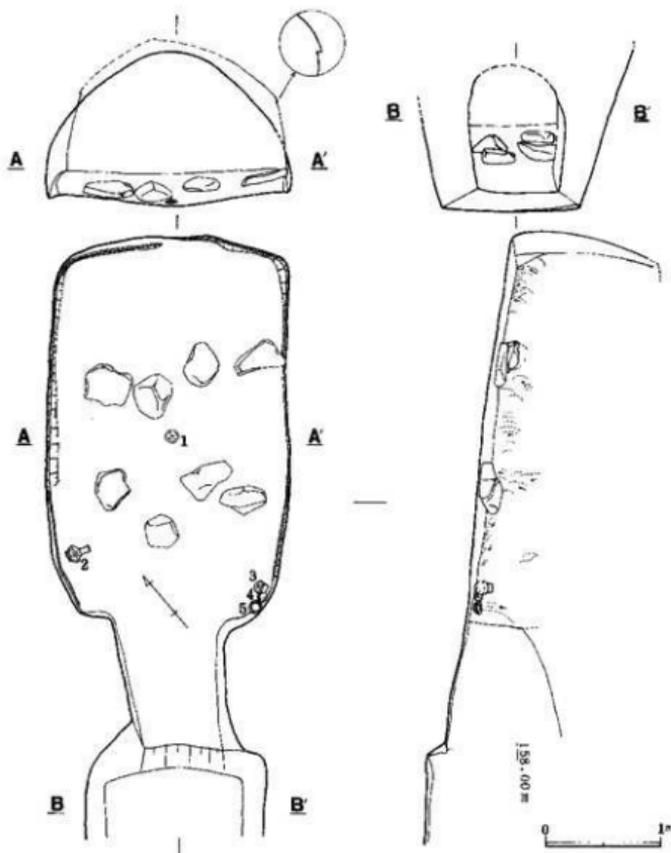
蓋(第10図1) 蓋(1)は小形であるが厚手になっており、天井部に輪状ツマミがつき、口縁部内側にかえりがつく。調整は回転ナデであるが、胎土は粗く砂粒も混り、粗雑なつくりである。内側の受部は浅く、かえりは内傾するが内側からは直立気味となっている。

坏(第10図4・5) 坏(5)の口縁部はやや内湾しているが、体部の中央は凹み底部は平らである。調整は両方とも回転ナデ、天井部の外面にはへらおこし痕が残る。内部の底にはへらによる直線状の痕がある。

坏(4)の底部はへらおこしで丸みをもつが、焼成時のひずみがある。口縁部の受部は浅く、立上りは短く内傾している。調整は回転ナデ仕上げで、胎土は緻密である。

埴(第10図3) 底部は平らで丸みをもって立上り、肩は張り出している。頸部はやや外傾しながら立上る。調整は、体部がナデ仕上げ、底部にはへらおこしの痕が残る。胎土はやや粗く砂粒も多い。

台付長頸壺(第10図2) 台は短く、裾は湾曲して張り出し三方に円形の透孔をもつ。体部は大きく張り出しながら立上り、胴を強く張り、カーブを描いて頸部まですぼまる。頸部は長く弓なりに内湾し、口縁部で広がり先端は丸みをもっている。調整は丁寧な回転ナデ仕上げで、胴の張り出し部分には強い2条の沈線を回らせ、その下部には長さ2cmの櫛歯による刺突文を一周させ、更にその下部に2条の沈線を施している。全面に自然釉が附着しており、胴の表面はざらついている。



第12図 尾崎横穴群 第I群4号穴実測図

## 5号横穴

4号穴と2.5mの間隔をおいた東側に位置し、床は道路面より1.2m下位にあった。堆積土は外部からの流入土に内部の崩落土が加わっていた。

横穴の主軸は北東方向にむいて、S60°Wに開口している。

玄室の形状は、やや縦長方形で羨道は中心線よりやや左側に偏っている。天井の形はほぼ全面にわたって剥落しているため明らかでないが、奥壁面の形状から推定した。

規模は次のとおりである。

玄室—奥行	2.80 m	幅	2.30 m	高さ	1.40 m
羨道—長さ	1.20 m	幅	0.60 m	高さ	1.20 m
前庭—長さ	1.10 m以上	幅	1.00 m		

東側壁の最奥部には床面から45cm高の位置に、縦横80cm大の穴があき、東側に隣接する6号穴の玄室中ほどの床に通じていた。これは6号穴との間隔が20cmほどのものであったために、6号穴を掘削する際、左側に寄りすぎたため、うすい隔壁が衝撃によって崩壊したものと推定されたが、6号穴はその位置からやや右側へそれて掘り進められていた。この状況によって、5号穴と6号穴が掘削された前後の関係が理解できる。

やや保存状態のよい壁面には加工痕が認められるが、幅が10～15cmのU字型の痕状のもの20cm程度のものの2種類以上の工具によって仕上げられたことが観察される。

玄室の床は平滑で、奥壁から羨門までの間は、20cmの比高差で前側に傾斜している。排水溝は玄室中央部から中心線がほぼ直線状に羨門まで導かれ、羨門と前庭は20cmの段差をもち、閉塞のための幅7cm、深さ5cmの削り込みが施されていた。この削り込みの前側にはブロック状の砂岩が3個積み重ねられていたが、これは閉塞用のものとみられる。この閉塞石の左側には須恵器・大形提瓶が正常位な状態で置かれていた。

遺物は玄室奥部に5個の川石と兩押品が集中していた。器種、数量は次のとおりである。

玄室—鉄刀1、刀子1、須恵器（蓋3、坏3、提瓶1）

前庭—須恵器（大形提瓶）

蓋（第14図6・7・9） 各器種とも天井部は回転ヘラおこして蓋（7・9）は内湾しながら立上り、口唇部は丸みをもっている。

蓋（6）の口縁部はわずかに外に開く。蓋（6・7）の外面には弱い稜をもち、蓋（9）には沈線を1条施している。調整は回転ナデで仕上げられている。蓋（6）の口唇部内側には凸線が1条施され、端部はうすくなっている。胎土は粗く砂粒が多い。

蓋（7）の口唇部は幅2mmほどのふくらみをもたせ、胎土は蓋（9）とともに緻密である。

坏（第14図3・5・8） 底部は回転ヘラおこしで、いずれも丸みをもって立上り、口縁部で短く外反する。

坏（3）の受部はやや深く、立上りは内傾している。

坏（5・8）の受部は浅く、立上りは内傾し、特に坏（8）の立上りはいくらかのびている。調整はナデ仕上げであるが、坏（5）の体部には、7mm大の小石が混入している。

胎土は環(3・5)が緻密であるが、環(8)は粗く砂粒が多い。環(3)は蓋(7)と、環(5)は蓋(9)と環(8)は蓋(6)とに、それぞれセットとして対応するものである。

**提瓶(第14図4)** 器体は中形で、腹部の片面は大きくふくらみ、背面はやや扁平である。両面とも同心円状のカキ目を残し、側面のカキ目は接合痕に沿ってすり消している。把手は便化して、突起を両面に貼り付けている。口縁は頸部から外開きに立上り、口唇部でわずかに内湾している。頸部の接合痕はすり消し、調整も丁寧にナデで仕上げている。

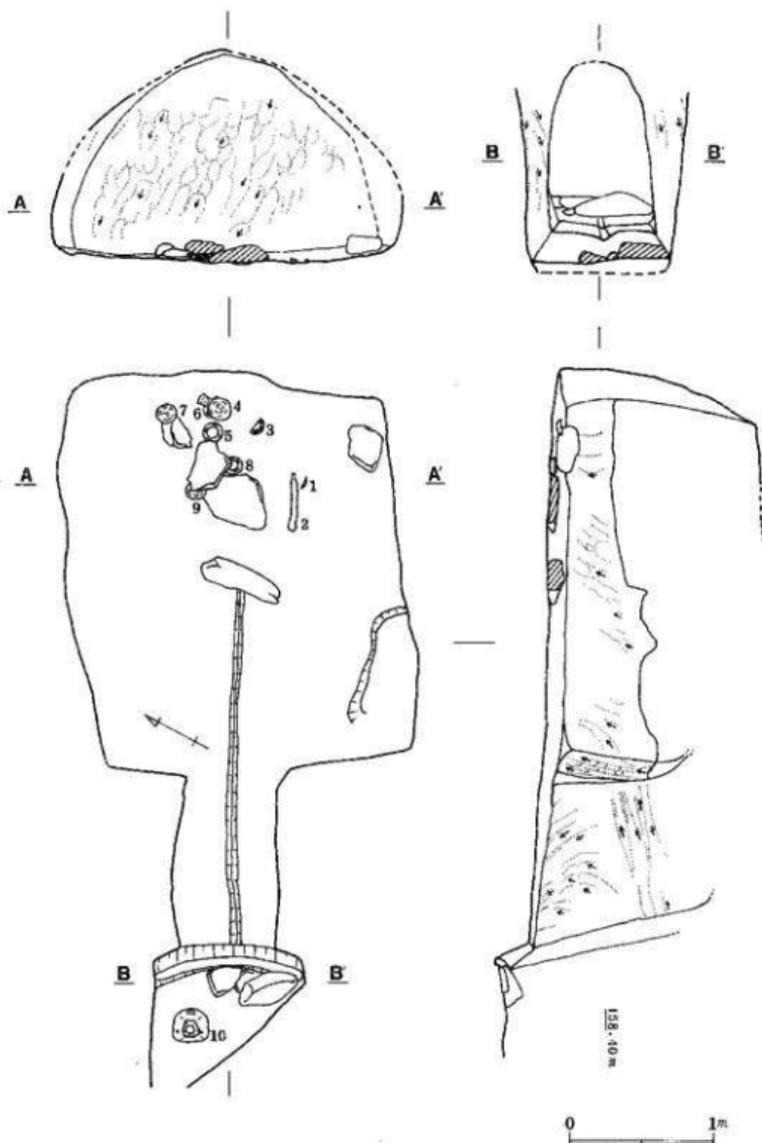
**大形提瓶(第14図10)** 前底部の閉塞部直近の西側壁沿いで出土したもので、正常位の状態で置かれていた。口縁部が欠失しているがほぼ完形で、器高27cmをはかる大形である。腹部は強く張り出しているが背面はやや扁平で、両面とも同心円状のカキ目を残し、側面の接合部は布目状の印目で締めている。把手は便化しておらず、正常な耳形である。頸部はやや外傾して立上り、口縁部に横に広げて端部を垂直にし、体部との接合痕は表面で丁寧にすり消している。底部は内側に大きく凹みをもたせて器の安定をはかっている。胎土は緻密であるが、胎土中の気泡によって大小無数の凸面が生じ、器厚の薄い部分は剝離し、また自然釉の付着によって、全体が粗面になっている。

**鉄刀(第14図2)** 平造りの大刀で、全長41cm、茎の長さ9.5cm、刀身の幅は柄元で3.3cm、先幅2.8cm、棟幅は元で1.1cm、先で0.9cmあり、反りはない。錆化によって木質部のあとが茎の一部と、柄元から切先にかけて残っている。柄の縁金具は幅2cm、厚さ1mmの銅板を巻き、錆はみられない。茎尻は丸みをもち、先端から1.5cm内側に目釘穴がある。

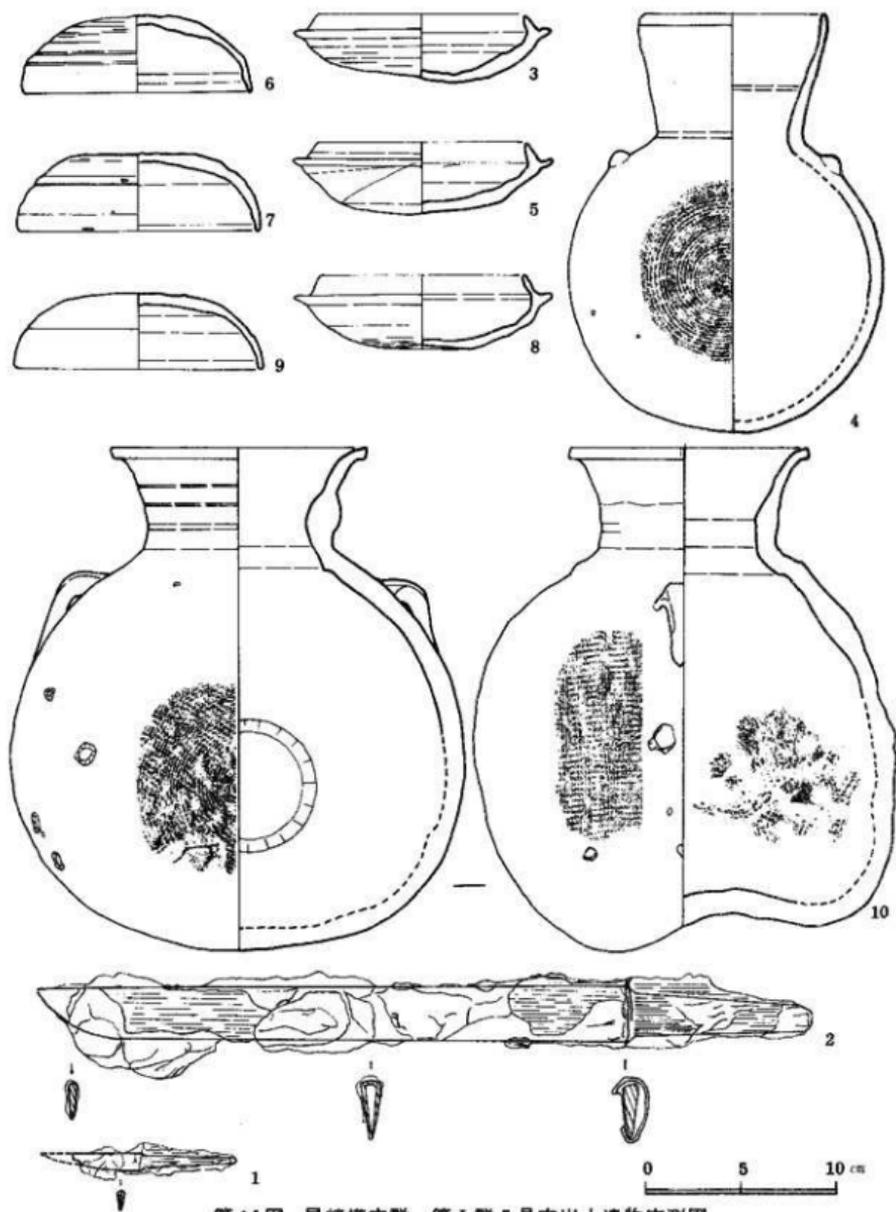
**刀子(第14図1)** 鉄刀(2)を取り上げたあと、その下部から検出されたもので、腐食と錆化が著しく、柄元を中心にして、その前後をわずかに残した小形のものである。刀身は3.5cmを残し、柄は欠失しているが茎の形状にしたがって残欠が認められる。その材質は鹿角であったと推定される。



6号穴奥壁面の調査状況



第13图 尾崎横穴群 第1群5号穴实测图



第14图 尾崎横穴群 第I群5号穴出土遺物実測図

## 6号横穴

西隣の5号穴との間隔は羨門の位置で3.0mある。横穴の主軸方向は北東におき、S40°Wに開口しており、その主軸方向は奥側で5号穴と交わるため、6号穴の玄室は5号穴奥壁部の隔壁を破壊するという結果を招いている。

この横穴の羨門は渠道に接した状態になっていた。床面は道路より90cm下位にあって、道路内側にもぐり込んでいるため閉塞部の掘り込みまでしかみられない。羨道から玄室にかけては大量の流入土によって埋没し、さらに上部からの崩落土がその上に堆積していた。

玄室の形状は、奥側がややふくらんだ縦長の方形で羨道を左側に寄せたもので、九天井である。玄室入口直近の西側壁は崩壊して5号穴の玄室奥壁近くで、人が出入りできる状態となっていた。

横穴の掘削作業は、穴のあいた隔壁部の床面をあぜ状の高まりに残し、幅10cmの側溝を施して区画を明瞭にした上で、やや方向を変えて掘り進め、完成させていた。

この横穴の規模は次のとおりである。

玄室——奥行 2.90 m 幅 1.80～2.10 m 高さ 1.30 m

羨道——長さ 1.90 m 幅 0.70～0.90 m 高さ 0.95 m

玄室奥部の床は平滑であるが、東側は、曲線状の長さ2.0m、深さ4cmの段差があるが、これは地盤没下によって生じたものである。

奥壁から羨門までの間は40cmの比高差で前側が低く傾斜している。排水溝は玄室の側壁周囲を巡って玄門中央にまとめられている。一方は分岐して斜めに羨道西壁につくもの、一方は中心線を通して閉塞部に導かれていた。閉塞部には、幅が8cm、深さ5cmの掘り込みが施されていた。

東側壁の下部と、玄室、羨道の天井は剥落が著しいが、残る壁面には工具痕が認められる。これは幅が10～15cmのU字型の鍬状のものと、幅5cmの角ばった鍬状の2種類以上の工具が使用されたものと推定される。この工具痕のほかに奥壁では床上15～60cmの位置に、西側壁には床上15～30cmの位置に、上から下に向けて縦又は斜めに無数の引掻き痕が認められたが、これは犬、狸など小動物の爪跡とみられるものであった。

遺物は玄室内の10個の川石と、玄室、羨道内の須恵器であるが、いずれも流入土と浸水によって移動したものと推定した。

副葬品の種類と数量は次のとおりである。

玄室——須恵器（蓋2、坏4、高坏6、平瓶1）

羨道——須恵器（蓋1、高坏1）

蓋（第16図11・13・17）各器とも小形である。蓋（11）は天井部中央の頂部に丸みをもつ乳頭状のツمامミ、口縁部の内部にかえりがつく。

受部は広く浅く、かえりは短く内傾する。調発はナテ仕上げで、ツمامミの横に「×」のヘラ記号をもつ。胎土は緻密である。蓋（13・17）は天井部まで丸くカーブを描く。

口縁部では外側を更に内湾させて、口唇部は薄く丸みをもっている。

坏(第16図6・12・14・15) 各器とも小形で(6)は底部が平らで、外傾して立上り、口縁部で更に外側に開く。調整は体部を回転ナデ、底部外面には荒いへらおこし痕が残り、「×」のへら記号をもつ。胎土は緻密である。

坏(12)はやや大きめで、底部に「差」のへら記号をもつ。調整は体部をナデ仕上げ、底部は荒いへらおこしである。胎土は粗粒で砂粒を含む。坏(14・15)はいずれも小形である。

坏(14)の底部はへらおこし痕が残っており、外開きに立上って口縁部で横に広がる。

受部の幅は小さく、内傾する立上りも小さい。体部の調整は回転ナデで、胎土は密であるが砂粒を多く含む。

坏(15)の受部は広く浅く、かえりは小さい。胎土は粗粒である。

高坏A(第16図1・5・7・8) 高坏は大別して大形のをA類とし、小形のをB類とした。高坏(1・5)は同じような製品である。坏の体部は、ゆるやかに横に張り出しながら立上り、外側は途中で更に横にふくらんで立上るが、内側は安定したカーブを描く。脚部は裾を大きく広げながら、端部で平坦な面をもち、先端を垂直にし、上面に小さなかえりをもつ。透孔は2方向に工具で上から切り下した線が1条施されている。調整は回転ナデによるが、脚部との接合部はナデにより調整されている。坏の内部にはそれぞれに重ね焼きによる色調の異なる部分があるが、これは高坏脚底部の径に対応している。胎土は、やや粗粒である。

高坏(7)の器高はやや低いが、高坏(1・5)とほぼ同口径のものである。坏の底部からゆるやかな広がり立上り、脚は短く裾に広がって平坦面をもつが、その幅は小さく、端部はやや外開きに作られており、上端にわずかにかえりをもつ。透孔は2方向に縦長の台形に鋭く切り込まれている。脚部との接合痕はかすかに認められるが、調整は丁寧なナデ仕上げで胎土は緻密である。

高坏(8)は坏の底部からゆるやかな広がりをみせて立上り、口縁部で外反する。脚部は細長く広がり、裾の端部は外開きに作られており、上端にかえりをもつ。2方向の大小2段の透孔は、上段には垂線状の切り込みを施し、下段は台形である。調整は脚部との接合痕がわずかに認められるが、丁寧な回転ナデで仕上げられている。胎土はやや緻密である。

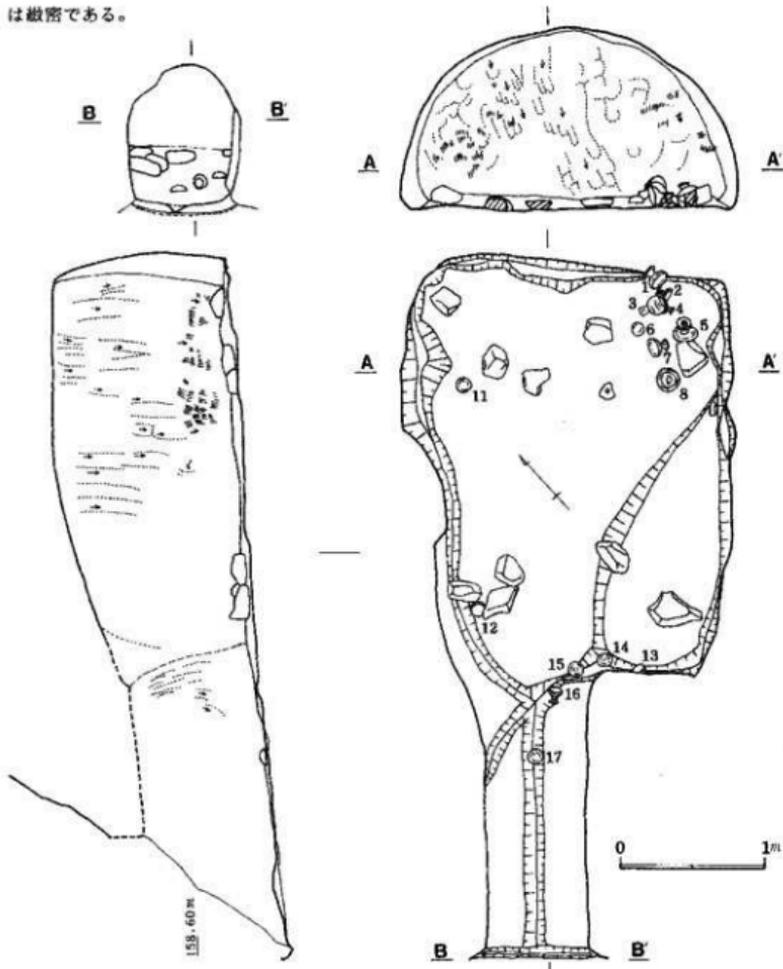
高坏B(第16図2・4・16) 高坏A類に比較して、小形のものである。高坏(2)は坏の底部が横に張り出し、急角度で外傾しながら立上り、口縁部は丸みをもって納めている。脚部は裾にゆるやかな広がりをみせて、わずかに平坦面をもって、端部は垂直としている。3方向に工具による長い条を施している。これは坏の底部まで達しているが、裏面までは通っていない。調整は回転ナデで、脚部にわずかな接合痕がみえる。胎土はやや密である。

高坏(4)の坏の底部は横に張り出し、ゆるく曲線を描いたあと、脚部はやや外傾して立上る。脚は短く裾に広がり、端部は薄く丸みをもって納めている。調整は丁寧な回転ナデで、脚部と坏部の接合痕は調整で消され、胎土は緻密である。

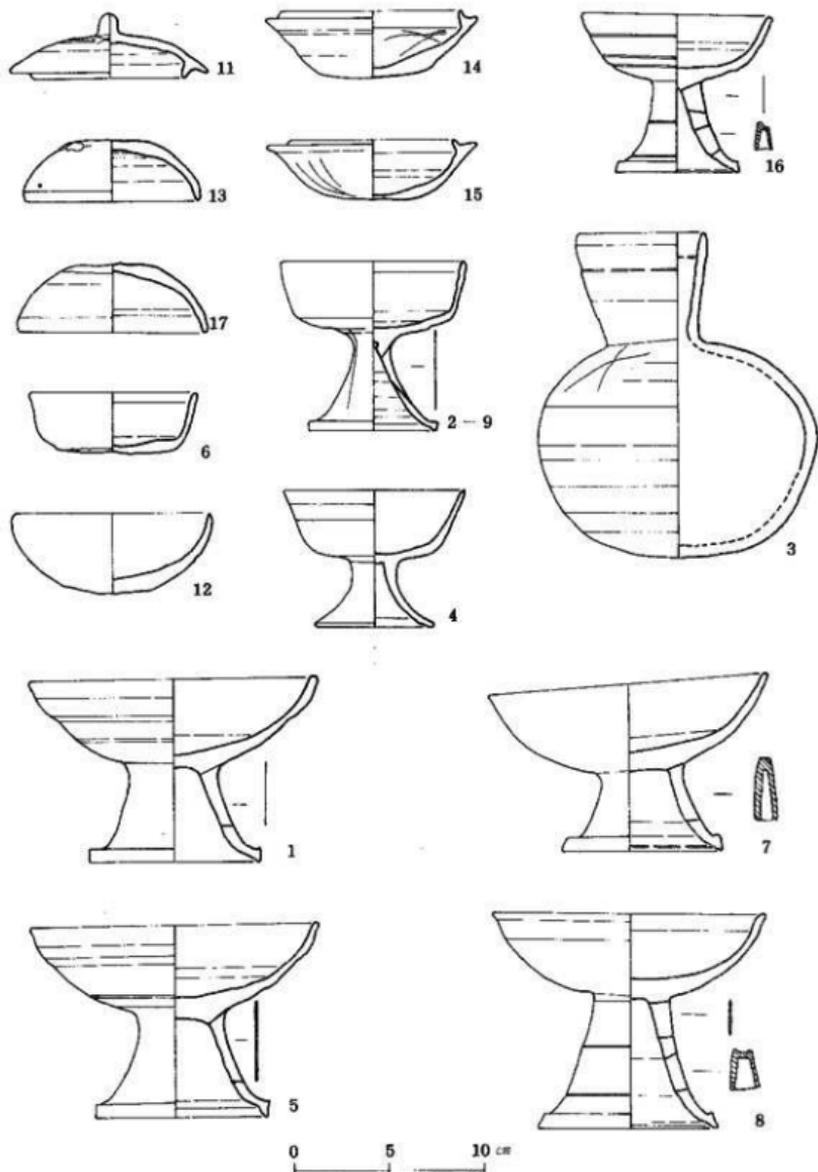
高坏(16)は坏の底部からゆるやかにカーブを描いて、口縁部まで外傾しながら立上っている。外面には、間隔をおいて3条の沈線を施している。脚部は細長く裾に広がり、端部はやや外開きに直線状に作っており、上端にわずかなかえりがつく。脚筒部の中央部に1条の沈線を

施し、その上下の4方向に透孔を設けているが、上段は条痕のみで、下段は鋭利な切口をみせる台形である。調整は回転ナデで脚部の接合度はみられない。胎土はやや粗粒である。

平竈(第16図3) 胴部はやや張りをみせ、頸部は小さくくびれているが、ふくらみながら立上る。調整は頸部はナデで、胴部はヘラ削りで中ほどから下側は、底部から板状のもので放射状に叩き締めている。頸部にかすかな接合度がみえ、肩に「×」のヘラ記号をもつ。胎土は緻密である。



第15図 尾崎横穴群 第I群6号穴実測図



第16图 尾崎横穴群 第I群6号穴出土遺物実測図

## 8号横穴

第I群の中で最東端に位置しており、6号穴との間隔は7mある。この間には7号穴があるが、これは工区外(下部)にあるために発掘調査を行っていない。この8号穴は、既に開口したものと見られていたが、実際は2号穴、3号穴と同様に玄室の天井全体が陥没したことによって崖の上部の岩肌が露出したもので、玄室の床面はこの露頭から4.5m下にあった。

全体が大きく崩れていたにもかかわらず、羨道天井部は崩壊を免れていた。羨門は道路に密着した状態で、床面は道路床面よりも50cm下位にあった。このため玄室内の堆積土の排除にはかなりの時間と労力を要した。

玄室壁面の剥落は著しかったが、奥壁の形状から推して、断面は家形と推定した。

平面プランは主軸を南北方向におき、S 15°Wに開口した縦長方形で、羨道は玄室の中心線を通る対称形である。

この横穴は、第I群の中では最大のものとなっているが、その規模は次のとおりである。

玄室——奥行 3.10 m 幅 2.35 m 高さ 1.50 m

羨道——長さ 1.40 m 幅 0.90 m 高さ 1.50 m

玄室内は大量の土石によって埋没していたにもかかわらず、床面は平らであり、遺物も土圧による損傷は認められなかった。

奥壁から羨門の間は、40cmの比高差で前に傾斜する。排水溝は玄室の周囲を回らせて、両側とも玄門の近くで消滅している。

閉塞部は幅が15cm、深さ12cmの切り込みが設けられているが、羨道の床と前庭との段差は3cmほどであった。

剥落、崩壊から免れた壁の一部には、不鮮明ながら工具痕が認められたが、これは幅が10～15cmのU字型の鎌状の工具で仕上げられた痕跡であった。

玄室内には12個の川石と須恵器で、石は奥側と手前側に並行に置かれていたものが、移動した形跡がある。須恵器は奥壁東側に寄せ集められた一群と、中央よりやや奥側に寄せられた一群、西側壁奥側に寄せられた一群の3ヶ所に分かれ、また中央より左側に点在する4個がある。器種と数量は次のとおりである。

須恵器(蓋11、坏13、高坏2、埴1、横瓶1)

蓋A(第18図1・2・4・9・15) 蓋A類は天井部と口縁部の境に、弱い稜をもつやや大形のもので、胎土もほぼ同質である。天井部はへらおとし痕が残るものの、へら削りを施している。器形は丸みもちながら口縁に達し、太い2条の沈線の間は、もり上って稜をなしている。

蓋(1・2)の口唇部は内傾し、蓋(4・9)はやや外に開いている。

蓋(9)は焼成によるひずみが著しい。

蓋(15)の外縁部は直立しているが、外側からも段をつけて、口唇部を薄くしている。

調整は各器とも、両面ナデで仕上げている。胎土はいずれも粗粒で、砂粒を多く含む。

蓋B(第18図11・18) 天井部と口縁部の間に、1条の沈線を回らせた同じような製品で

ある。天井部外面にはヘラおこし痕が残る。いずれも「×」のヘラ記号をもつ。

蓋(11)の内側口縁部には、薄い1条の沈線を施しているが、口唇部には厚い丸みをもたせている。調整はナデ仕上げで、胎土は粗い。

蓋C(第18図12・14・20・21・30) 各器とも天井部にはヘラおこし痕が残る。器形はゆるやかなカーブを描いて口縁部にいたる。口縁部は丸くふくらみをもって、わずかに内湾している。

蓋(14)の内側口縁部には、1条の弱い沈線を施している。

調整は体部の両側を回転ナデで仕上げ、胎土は蓋(14・21)が砂粒を多く含み粗く、その他は緻密である。

蓋D(第18図17・24) 蓋(17)はやや小形で、口縁部は垂直に立上り、天井部は丸いカーブを描く。

蓋(24)の口縁部は、やや外傾している。内側口縁部に1条の沈線を施し、口唇部は丸くふくらみをもたせている。

天井部はそれぞれヘラおこしで、両面ともナデで仕上げている。胎土は蓋(17)が緻密であるが、細粒の砂粒を含み、蓋(24)は粗面である。

坏A(第18図3・5・23・25・26・31) 各器ともほぼ同じような製品である。口縁部の立上りは1cm前後で、内湾する角度は小さい。受部の溝はやや深く、端部は外反する。

坏(23)の外面には自然釉がみられるが、気泡によって両面とも凹凸が著しい。

調整は口縁部、体部が回転ナデ、天井部はヘラおこしで、胎土は坏(26・31)がやや密であるが、その他は粗粒である。坏A類は蓋A類とセットとして対応する規格である。

坏B(第18図10・27) 両器とも同じような形である。受部の溝はやや深く、外反する口縁部は短い。立上りはA類に比較して大きく内傾する。

坏(10)の立上りは、やや長い。

調整は、底部はヘラおこし痕をすり消し、体部の内面はナデで仕上げている。胎土は坏(10)がやや緻密であるが、坏(27)は粗粒で砂粒が多い。

坏C(第18図7・8・16・19・22) 各器とも受部が浅く、内傾する立上りは短く、外反する口縁部も短い。

坏(22)の立上りは、内側から丸みをもって内湾しているのが特徴である。

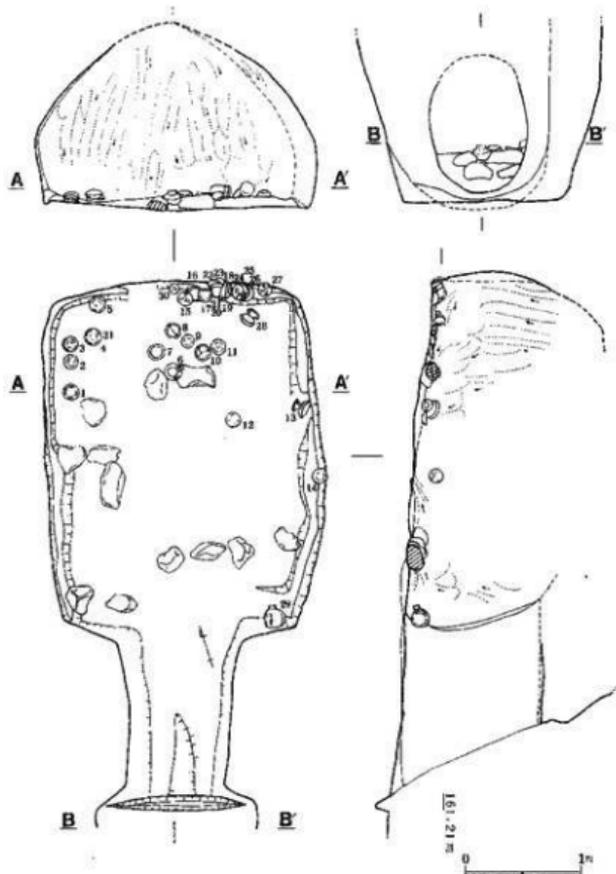
天井部はヘラおこし痕が残る。坏(7・19)はおこしの後、叩き締めている。体部の調整はナデ仕上げである。胎土は坏(19)が緻密であるが、その他はやや粗く、坏(16)の内面には粒状の自然釉の付着が多い。

高坏(第19図13・28) いずれも同じような形、胎土も共通する製品である。坏の体部は浅く横に張り出して、口縁部もやや外傾する。坏の底部と口縁部の中間には、2条の沈線が施されているが、高坏(13)は沈線の間がふくらんで稜をなしている。脚部は太く兩に広がり、底部に平坦面をもち、外縁部は外開きに立上りをみせて、端部は丸みをもって納めている。

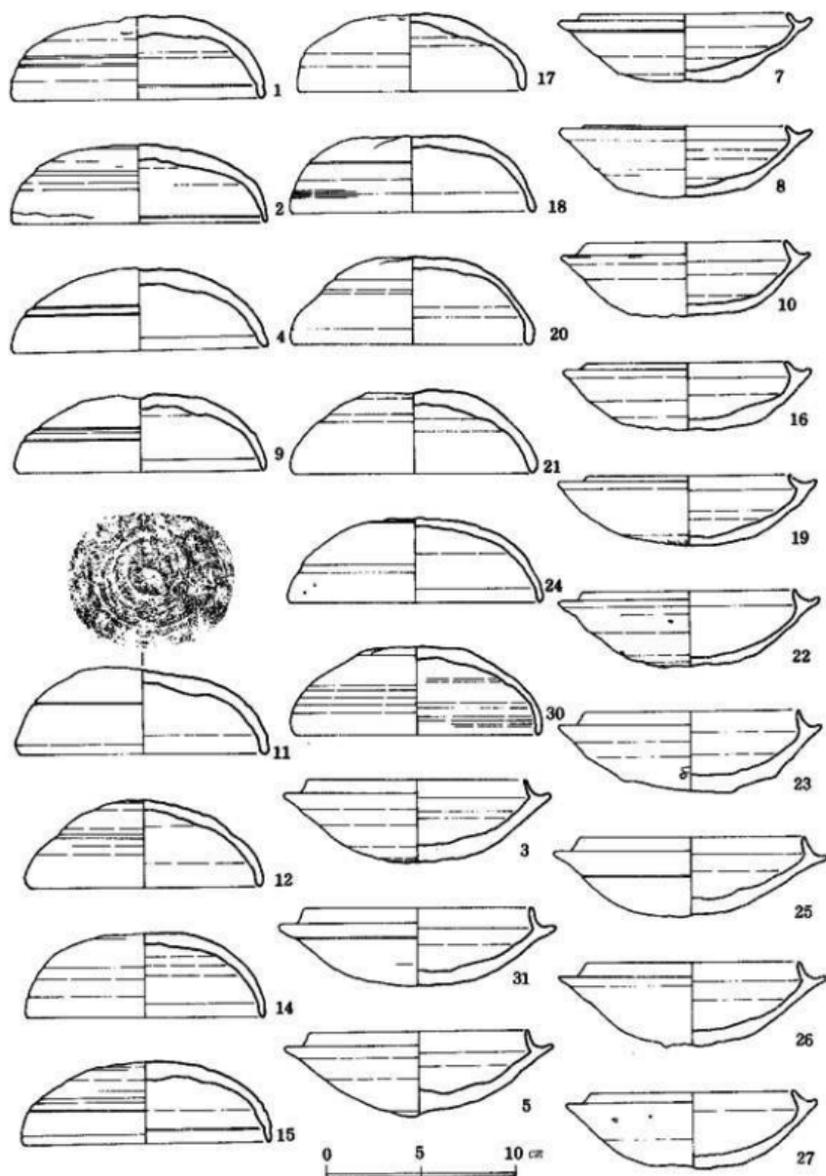
2方向の透孔は、長い二等辺三角形で、鋭い切口をみせている。調整はナデ仕上げで、脚部の接合痕はみられない。胎土は粗粒で、多くの砂粒を含む。

増(第19図6) 胴を大きく張り出し、頸部は丸みをもって短くすばまり、口縁部は外反する。口唇部は斜外側に切り下して、上端はやや鋭い稜をなしている。調整はナデ仕上げであるが、体部の下側はヘラ削りで、胎土はやや緻密である。底部は厚い。

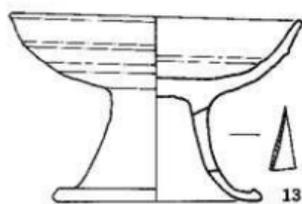
横瓶(第19図29) 器体はやや大形で、厚みをもっている。胴の側面は丸みをもって強く張り出し外面の同心円状のカキ目は丁寧に消している。背部はほぼ平らで、ヘラ削りの後、叩き締めている。頸部は短く、口唇部は大きく外反しており接合痕が明瞭にみえる。調整は頸部をナデ仕上げで、体部の側面はヘラを用いている。胎土は緻密である。



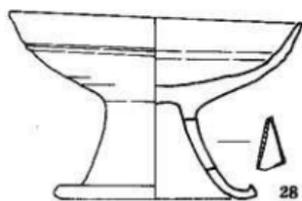
第17図 尾崎横穴群 第I群8号穴実測図



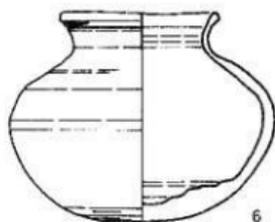
第18图 尾崎横穴群 第I群8号穴出土遺物実測図



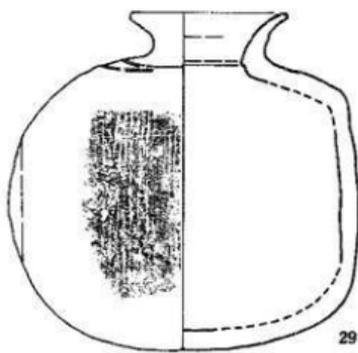
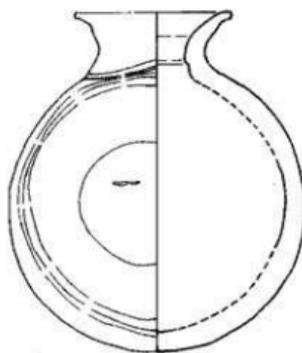
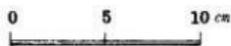
13



28



6



29

第19图 尾崎横穴群 第I群8号穴出土遺物実測図

## 第 II 群 横 穴

第 II 群は、第 I 群と県道を隔てた下方斜面に展開している。ここは調査以前は密生した竹やぶであった。

試掘区画の西側は、表層土が竹の根茎で固められて薄く、その直下は砂岩の地山で、東側に移行するにしたがって堆積土が深くなる。手掘りでは地山の確認が困難で、重機によって県道直下まで掘り進めたが、黒ボク土の厚い堆積層のため地山は検出できなかった。このことから得た知見は、かつては西側から東に向けて V 字型に切りこんだ谷底部で、後世の道路敷設の際に、上部斜面の掘削した排土をここに集中的に埋立てたため、現地形に至ったものと推定した。

第 1 次の調査では西側の最下方の 1 号穴より上方の 4 号穴まで、階段状に並ぶ 4 基の横穴を検出した。なお、その東側の県道直下に至る斜面には、1 基ないし 2 基の横穴が存在するものと推定したが、危険をとまなうため、それ以上の調査は代替道路の架設後の昭和 62 年度に行うこととした。

昭和 62 年度の調査は、6 月 1 日から再開し、重機による掘削を進めて新たに横穴 1 基を発見し、更に県道を切断して掘削を進めた結果、玄室とみられる痕跡を検出したが、完全に破壊され、全面に山石をもって充填されているため、原形を把握することはできなかった。従って、第 II 群で調査対象とした横穴は 5 基で、破壊された 1 基を含めると約 10.0 m の水平距離間に 6 基の横穴が設けられたことになり、その比高差は 6.0 m で、第 I 群に比較して立体的な配列を示している。

### 1 号横穴

西端の最低位置にある。前庭部は長く、地山を U 字型に掘り進めて閉塞部に至る。

前庭の末端は、古い作業道によって削り取られており、墓道は検出できなかった。

羨道から玄室にかけて、外からの流入土と内部の崩落土が堆積していた。側壁もかなり荒れ、天井部はほぼ全面にわたって剝落していた。

床面も、地下水の通路となっていた形跡があり、深い溝や凹凸がみられる。

平面プランは、隅丸の縦長方形で、羨道をやや右側に寄せており、丸天井形と推定した。横穴の主軸方向は北北西で、S 20° E に開口している。

横穴の規模は次のとおりである。

玄室——奥行	2.50 m	幅	1.25 m	高さ	0.90 ~ 1.10 m
羨道——長さ	1.40 m	幅	0.50 ~ 0.90 m	高さ	0.90 m
前庭——長さ	3.50 m	幅	0.80 ~ 1.40 m		

玄室奥壁から羨門までの間は、30 cm の比高差をもって前側に傾斜し、玄室床面には排水のための施設は施されていない。羨門と前庭部の間は 10 cm の段差を設けているだけで、閉塞のための削り込みは施されていない。

側壁の剝落を免がれた部分には、掘削時の工具痕が認められるが、これから刃幅が 7 ~ 10 cm

の角型の傘状のものが使用されたと考えられる。

遺物は、玄室内に7個の川石が不規則に置かれていたほか、副葬品には次のものがある。

玄室—鉄滓1、須恵器（蓋1セット）

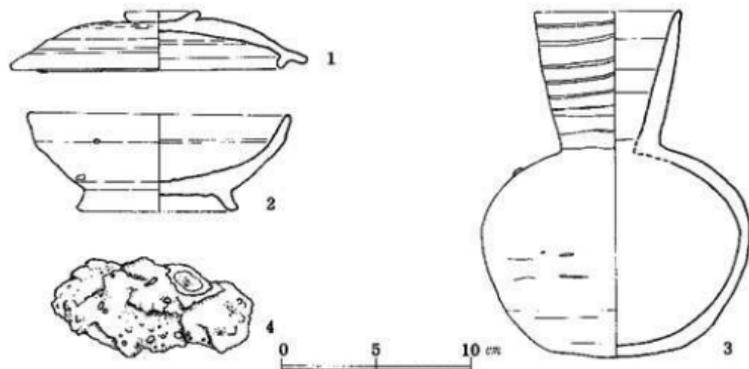
前庭—須恵器（長頸壺1）

蓋（第20図1） 浅く広がり、天井中央には輪状ツマミが付き、口縁部内側には厚みをもった短いかえりがつく。調整は両面とも回転ナデで、上面の口縁部には浅い1条の凹線を施している。胎土はやや粗く、砂粒が多い。

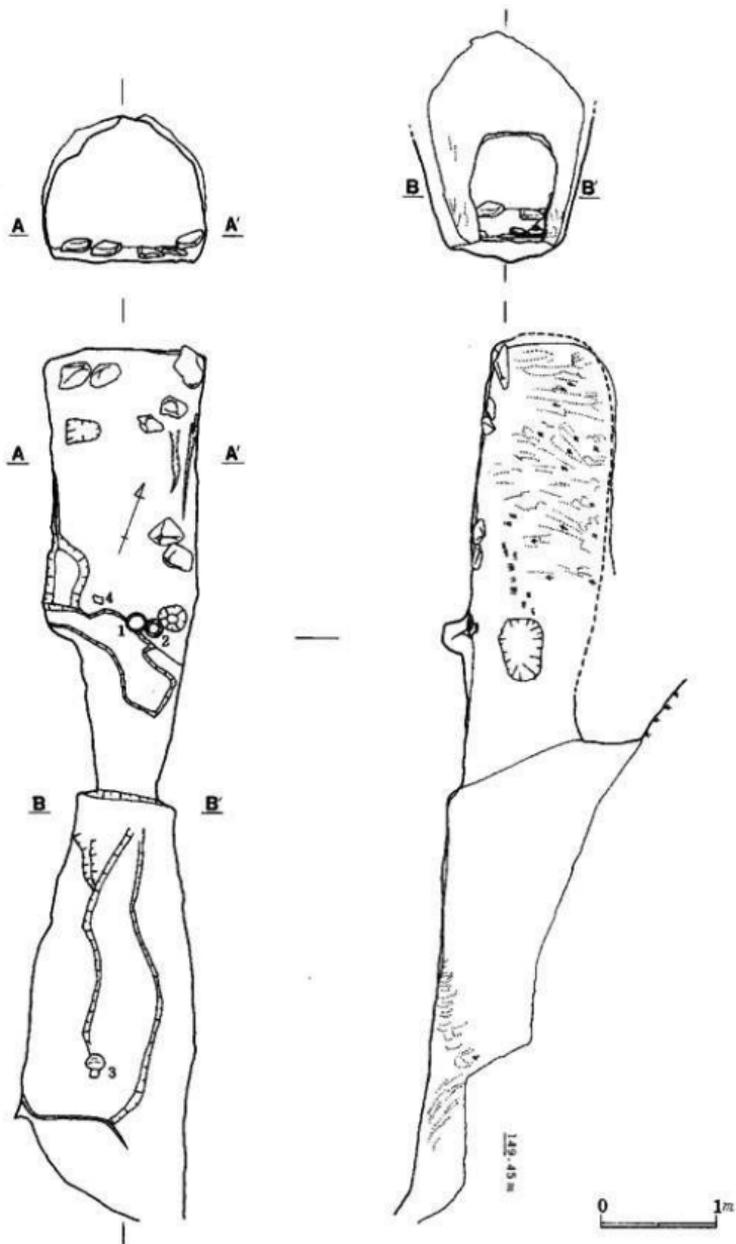
壺（第20図2） 底部には、幅広く厚みをもたせて張り出した高台がつく。その端部は丸みをもたせている。体部は外側を横に張り出しながら立上り、口縁部では垂直に立つが、内面はゆるやかにカーブを描いて立上り、口縁部は丸みをもって納めている。調整は両面とも回転ナデで、胎土は粗い。

長頸壺（第20図3） 体部はほぼ球形となっているが、肩部に2か所小さなボタン状の浮文を貼り付け、わずかな張りをもたせている。頸部は体部の中心から外傾しながら、小さなふくらみをもって立上り、口唇部は薄く丸みをもつ。調整は回転ナデであるが、胴の下部から底部までは、ヘラ削りである。頸部の外側には、ラセン状にナデ上げた痕がよく残り、接合痕は丁寧に消している。胎土はやや緻密である。

鉄滓（第20図4） 玄室入口付近の床面から検出されたが、通常の鉄滓に比較して重畳感があり、磁石にも強く反応することから、多くの鉄分を含んでいることがわかる。表面の形状は凹凸と発錆が著しく、全面に発泡による気孔がみられる。大きさは、長さ15cm、最大幅7cm、高さ4.5cmで364gの重さをもつ。



第20図 尾崎横穴群第Ⅱ群1号穴出土遺物実測図



第 21 图 尾崎横穴群 第 II 群 1 号穴実測図

## 2号横穴

1号穴の東2m、1.6m高い位置にある。

前庭部は細長く、羨道、玄室ともに流入土と剥落した土石によって充填されていた。玄室内部の天井、側壁の崩壊は著しく、床面のほかは、ほとんど原形をとどめない状態であった。

平面プランは、奥部が広がりをもつ縦長形で、羨道を左側に寄せてあり、丸天井形と推定される。

横穴の主軸の方向は、北北西で、S 20°Eに開口している。

各部分の規模は次のとおりである。

玄室——奥行	2.50 m	幅	1.30～1.80 m	高さ	1.10 m
羨道——長さ	1.30 m	幅	0.45～0.80 m	高さ	0.60～0.70 m
前庭——長さ	4.40 m				

玄室床面は比較的平滑で、奥壁から羨門までの間は25cmの比高差で前側に傾斜する。排水溝は奥壁中心よりやや右寄りの位置から、左回りに側壁に沿って走り、玄門を横切って東側壁の隅に達し、羨道の東側壁に沿って羨門の位置まで通じている。

さらに、羨門と前庭の間には、10cmの段差を施しているが、閉塞のための判り込みは設けられていない。前庭部は地山をU字型に細長く掘削している。

遺物は、玄室の奥側と入口側に3個ずつ川石が並行して置かれ、また1個は中央近くに置かれていた。

副葬品は次の各種である。

玄室——須恵器（坏2、高坏2）

羨道——須恵器（埴1）

坏（第24図2・3） いずれも小形で、口縁部で内湾し口唇部は丸みをもってふくらむ。

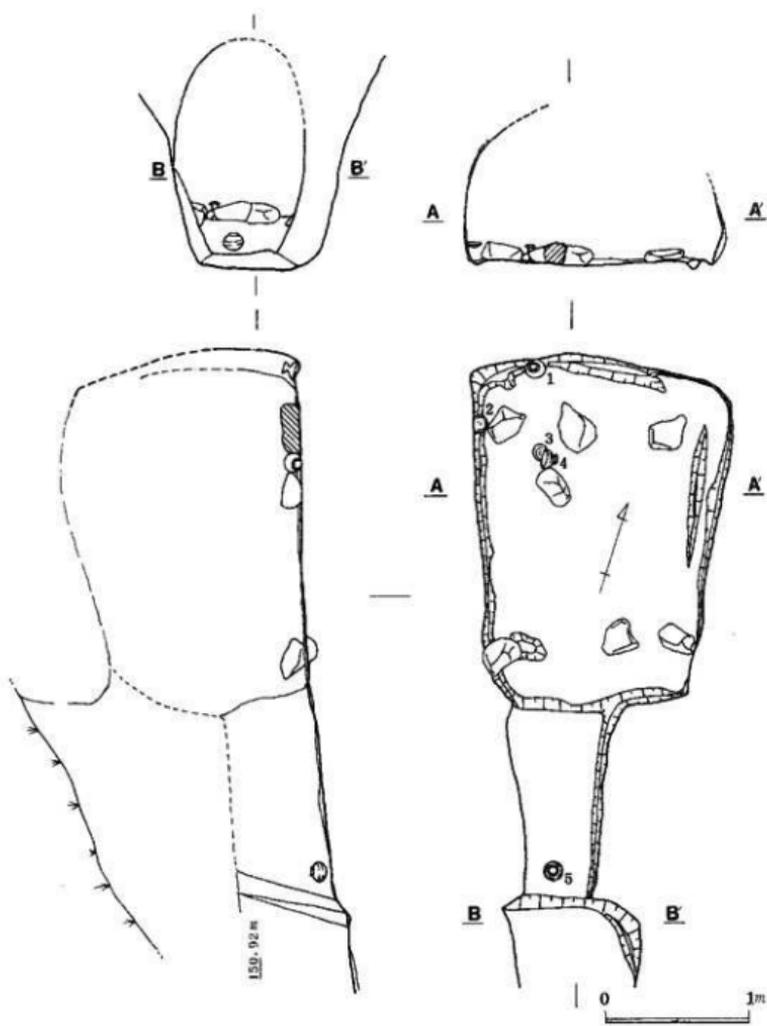
（2）の底部はヘラ削りで平坦面をもち、口唇部で内湾して、外側に弱い稜をつくり、坏（3）の底部はヘラ削りで丸みがあり、体部の中ほどに指幅ほどの3条の凹線を施している。

調整は体部の両面ともナデ仕上げで、坏（3）の底部には「<」のヘラ記号がある。胎土は坏（2）が緻密であるが、坏（3）は砂粒を多く含む。

高坏（第24図1・4） 高坏（1）の坏は深みをもつ坏部である。内面の立上りの部分には、指のナデ仕上げによる凹線がうすく残る。脚部はやや深く、太く短く裾に広がってわずかな平坦面をもつ透孔は縦に裏側まで通った条痕に変化しており、2方向にある。調整は回転ナデで胎土は粗く、砂粒を多く含む。

高坏（4）の坏は底部が水平に広がり、カーブを描いて立上る深みをもつもので、内面も同じ傾向をもつ。脚部は高坏（1）と同様で、調整も同手法である。胎土は緻密である。

埴（第24図5） 底部はやや平坦面をもち、頸部は短く立上り、わずかに内傾する。肩から底面までの間には指による3条の広い凹線を施し、下部はヘラ削りで仕上げている。調整は丁寧なナデ仕上げで、胎土は緻密である。



第 22 图 尾崎横穴群 第 II 群 2 号穴实测图

### 3号横穴

2号穴の東3m、1.2m高い位置にある。主軸を南北方向におき、ほぼ真南に開口する小形の横穴である。

表道、玄室とも土砂流入と崩壊が著しく、排土作業中や実測中にも、しばしば落盤が発生した。このため、玄室床面以外の形状は推定の域にとどまる。また玄室奥壁の東端部床面より20cm高の位置に幅50cm、高さ70cmの穴があげられていたが、これは東側に隣接する4号穴の前庭部西側壁に通ずるもので、人為的に掘削されたものである。

平面プランは、奥側にふくらみをもたせた隅丸縦長方形で、表道を左側に寄せており、九天井形と推定される。

前庭部は削り取られて短い。横穴の規模は次のとおりである。

玄室——奥行	2.00 m	幅	1.10～1.45 m	高さ	1.10 m
表道——長さ	0.80 m	幅	0.60～0.80 m	高さ	0.90 m
前庭——長さ	1.00 m	幅	0.80 m		

玄室床面には、ゆるやかな凹凸がみられる。奥壁から表門までの間は15cmの比高差をもって前庭に傾斜している。排水溝は玄室東側壁の中央部から左回りに側壁沿いに一周し、玄門を横切って東側壁の角に達し、更に玄門中央から分岐して表門の方に導かれているが、中途で消えている。

表門閉塞部には幅20cm、深さ10cmの削り込みを設け、閉塞に用いたものの一部とみられる3個の川石が置かれていた。

玄室内の遺物は、奥壁側と中央部に3個ずつの川石が並行して置かれていたほか、土師質土器Ⅳが玄室入口付近で床面よりもかなり上の堆積土中から検出されたが、これは二次的な遺物と判断された。副葬品には次の各種があった。

玄室——須恵器（蓋1、坏1、高坏1） 土師質土器（高台付坏1）

前庭——須恵器（大壺と推定されるものの破片6個）前庭堆積土中より検出

蓋（第25図2） 天井部からゆるやかな丸みをもち、口縁部でわずかに内湾する。調整は天井部がへらおこしで、体部はナデ仕上げ。胎土はわずかに砂粒をふくむ。

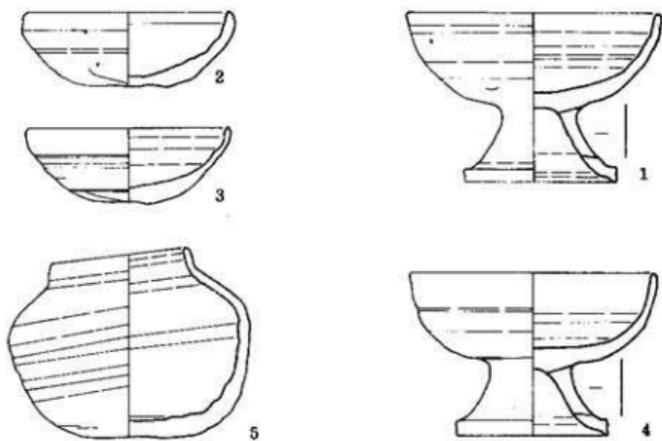
坏（第25図1） 底部はへらおこしで丸みをもち、ゆるやかなカーブを描いて立上る。受部の溝は丸みをもって、やや深く、立上りは短く内傾し、端部は薄く仕上げている。調整はナデ仕上げで、胎土はやや密である。

高坏（第25図3） 小形の製品で坏部の底は平坦に広がり、カーブを描いたあと垂直に立上り、深みがある。脚は細長く、裾が広い。透孔は2方に条痕が切りこまれ、裏側に達している。調整はナデ仕上げで、胎土はやや緻密である。

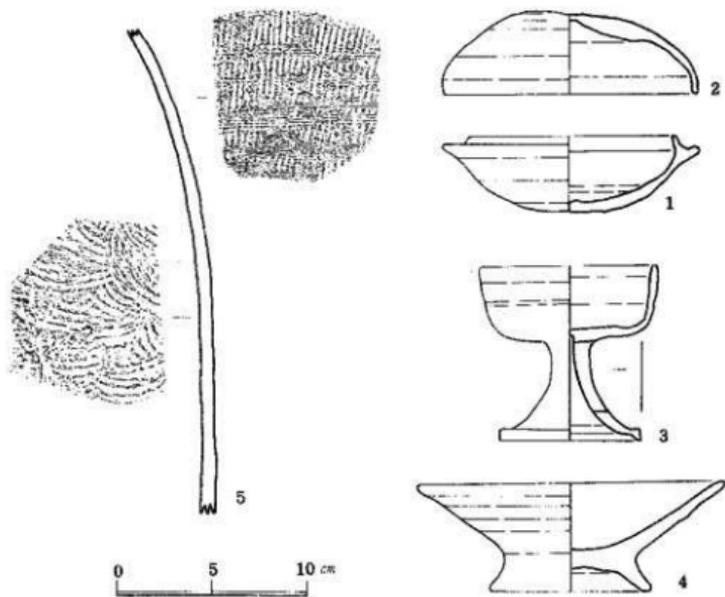
土師質土器・坏（第25図4） 末端を強く張り出した高台を持つ坏で、内面底部は丸みをもち、体部は外傾しながら立上り、先端に行くにしたがって薄くなる。両面ともロクロ仕上げである。

大壺（第25図破片5） 器種は大壺と推定した。外面は布目状の印目をもちカキ目を水平に





第24图 尾崎横穴群 第II群2号穴出土遺物実測図



第25图 尾崎横穴群 第II群3号穴出土遺物実測図

#### 4号横穴

3号穴の奥壁直近を、4号穴の前庭部西側がかすめて通り、羨門は3号穴の真上の斜面上にあたり、両者の標高差は1.2 mある。

横穴の主軸は北西におき、S 30°Eに開口している。

この横穴は掘削当初から、玄室内で崩壊が始まり、横穴としての機能を果さず、使用されなかったようである。

調査によって確認できた部分は、羨道と玄室の西側壁、奥壁及び床面である。注目されるのは、奥壁の位置に直径40 cm～50 cm大の川石が、奥壁に貼付けた状態で積み重ねられていたことである。この石を除去したあとの奥壁には安定した壁面はみられず、弛緩した岩屑状の泥土による堆積層があり、一部には黒色土もみられた。また東側壁にはもとの壁面は見当らず、大小のブロック状の砂岩が堆積しており、調査中にも天井と側壁の崩壊による落盤が頻発するほど弛緩していた。このことから東側壁、奥壁、天井部は当初から小規模な地すべり的な崩壊が発生したことが考えられる。

奥壁に押しつけた状態の川石は、奥壁の押し出しを阻止する手段として置かれたものようであるが、東側壁の崩壊をみるに至って、以後の施工と使用を断念したものと推定される。天井部は崩壊が著しいものの、丸天井形と推定した。

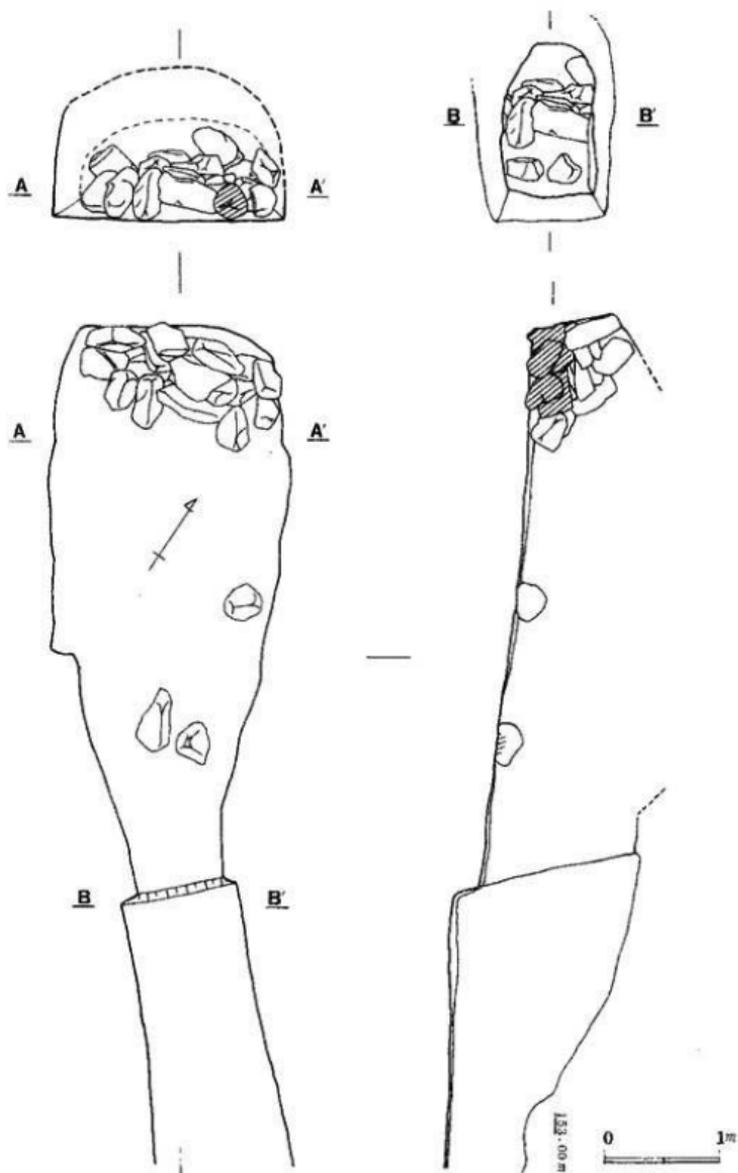
床面には、排水のための施設はなく、遺物は奥壁に積まれた19個の川石と、衝撃によって奥壁の上部から転落したとみられる3個の川石のみであった。

この横穴の規模は次のように推定した。

玄室—奥行	2.80 m	幅	2.00 m		
羨道—長さ	2.05 m	幅	0.80 m	高さ	1.20 m
前庭—長さ	4.00 m	幅	1.00～1.70 m		

羨門から前庭部の間には20 cmの段差が設けられていた。前庭部は地山をU字型に掘削した入念な施工である。

前庭部西側壁の羨門から1.5 m前側の位置には、長径80 cmの長円形の穴が開口しており、これは3号穴の奥壁に通ずるもので後世の加工である。



第 26 图 尾崎横穴群 第 II 群 4 号穴实测图

## 5号横穴

4号穴の東側3mにおいて4号穴よりも1.1m高い位置にある。

主軸を南北方向におき、真南に開口する。

羨道、玄室とも流入土と内部の剝落土によって充填され、原形がかなり損われていた。

平面プランは、縦長方形で、天井部はテント型に近い丸天井である。羨道は他の横穴に比較して長い。

各部分の規模は次のとおりである。

玄室——奥行	2.15 m	幅	1.65 m	高さ	1.20 m
羨道——長さ	1.75 m	幅	0.45 ~ 0.70 m	高さ	0.85 m
前庭——長さ	4.00 m (前方は削り取り)	幅	1.00 m		

玄室床面は、ゆるやかな起伏があるが、ほぼ平坦で、奥壁から羨門の間は35cmの比高差をもって前側に傾斜し、排水溝は1本が玄室奥壁中央から、左回りに側壁に沿い、玄門から羨道中心を通過して閉塞部に導いてあり、もう1本は玄室東側壁に沿っているが、両端末は消滅している。

羨門から前庭の間には、15cmの段差を設け、閉塞のための切り込みはみられない。周囲の壁、天井は剝落が著しいが、両側壁には掘削の際の工具痕が認められる。これから幅が4~5cmの角形のもの、10cmのU字形の2種以上の鎌状の工具が使用されたことがわかる。また西側壁の奥部には、小動物の爪跡とみられる無数の引掻痕がみられた。第1群の6号穴でも同様の痕跡が認められている。

遺物は、玄室の奥側に3個、前側に4個の川石が置かれていたほか、副葬品は次のとおりである。

玄室——須恵器(蓋2、坏1、高坏1、平瓶1、直口壺1) 鉄刀1

蓋(第28図3・4) 2個はいずれも寸法・形状は同じで、胎土も共通する製品である。天井部は丸みを持ち、ゆるやかなカーブを描いて、口縁部は内湾気味で、口唇は丸くふくらみをもつ。内面は指によるナデ仕上げの幅広い凹線を、4~5条施している。調整はナデで仕上げ、天井部はヘラ削りで「X」のヘラ記号を持ち、胎土は緻密である。

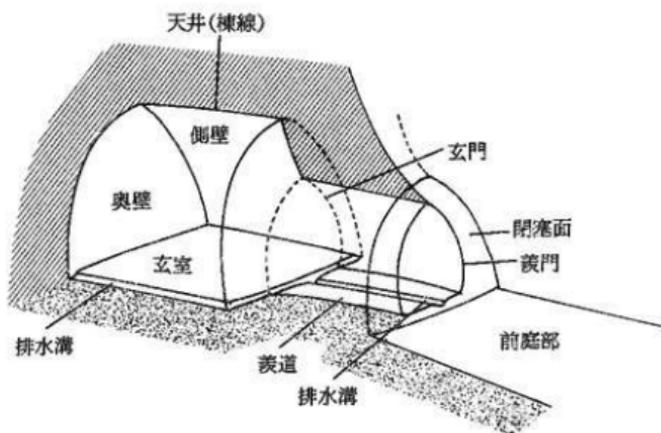
坏(第28図2) 底面は丸みを持ち、口縁部まで外傾し、受部の溝は丸みをもって、立上りは短く内傾する。調整は底部がヘラおこしで、体部はナデ仕上げ、内面の底はヘラで仕上げ、体部から口縁部まではナデで仕上げる。胎土は緻密である。この坏は、蓋(3・4)のいずれれかとセットになると考えられる。

高坏(第28図6) 小型のもので、坏部の底は大きく横に張りながら、体部は垂直に立上り、深い。脚部は細長く、裾が広がり、端部はやや丸みをもつ。脚部の3方向には、縦刻線が施されている。調整はナデ仕上げで、胎土は粗い。

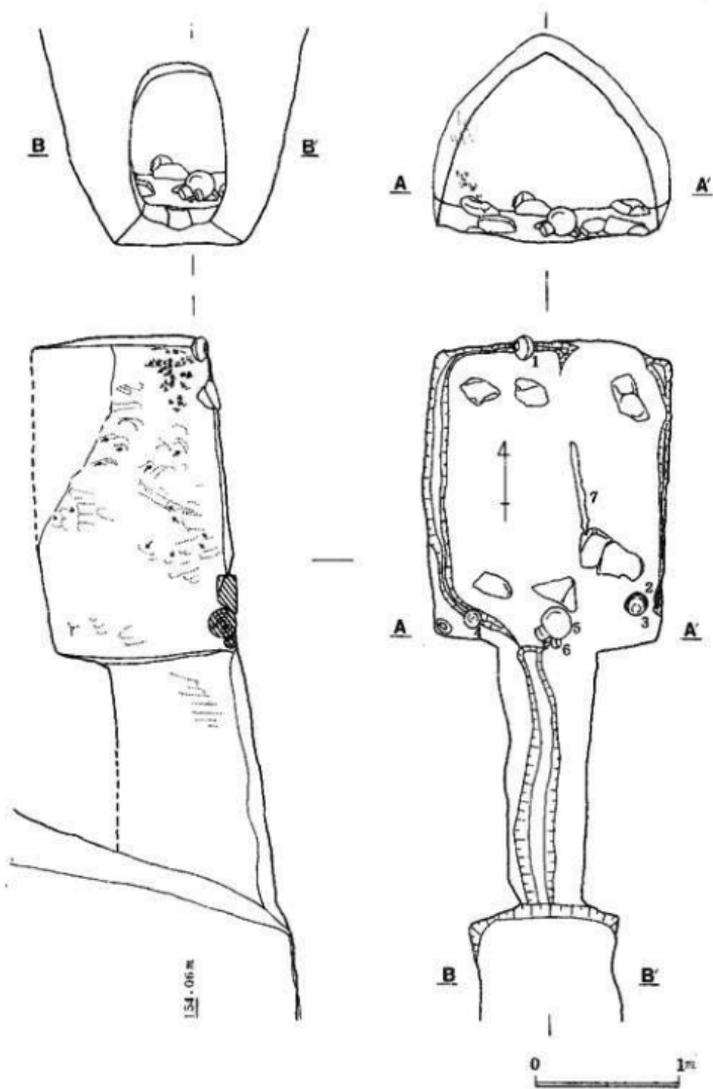
平瓶(第28図1) 底部は平坦面をもって、肩に張りをもたせて頸部はすぼまり、やや偏心して立上る。調整は底部から体部の中ほどまでがヘラ削り、上部はナデで仕上げている。胎土は緻密である。

直口壺（第28図5） やや大形のもので、器高は25cmをはかる。体部はほぼ球形であるが、胴にわずかに張りをもたせる。肩から頸部までは回転方向に沿う櫛目を施し、胴から下部は粗い布目状の叩目で櫛目を消しているが、底部には叩目と櫛目を残す。肩の対称位置に厚いボタン状の浮文を貼りつけている。頸部は広く直立する。口縁部の外側をわずかに内湾させて、口唇部を薄くしている。頸部の調整はナデで仕上げ、体部内側には青海波の叩目がある。胎土はやや緻密である。

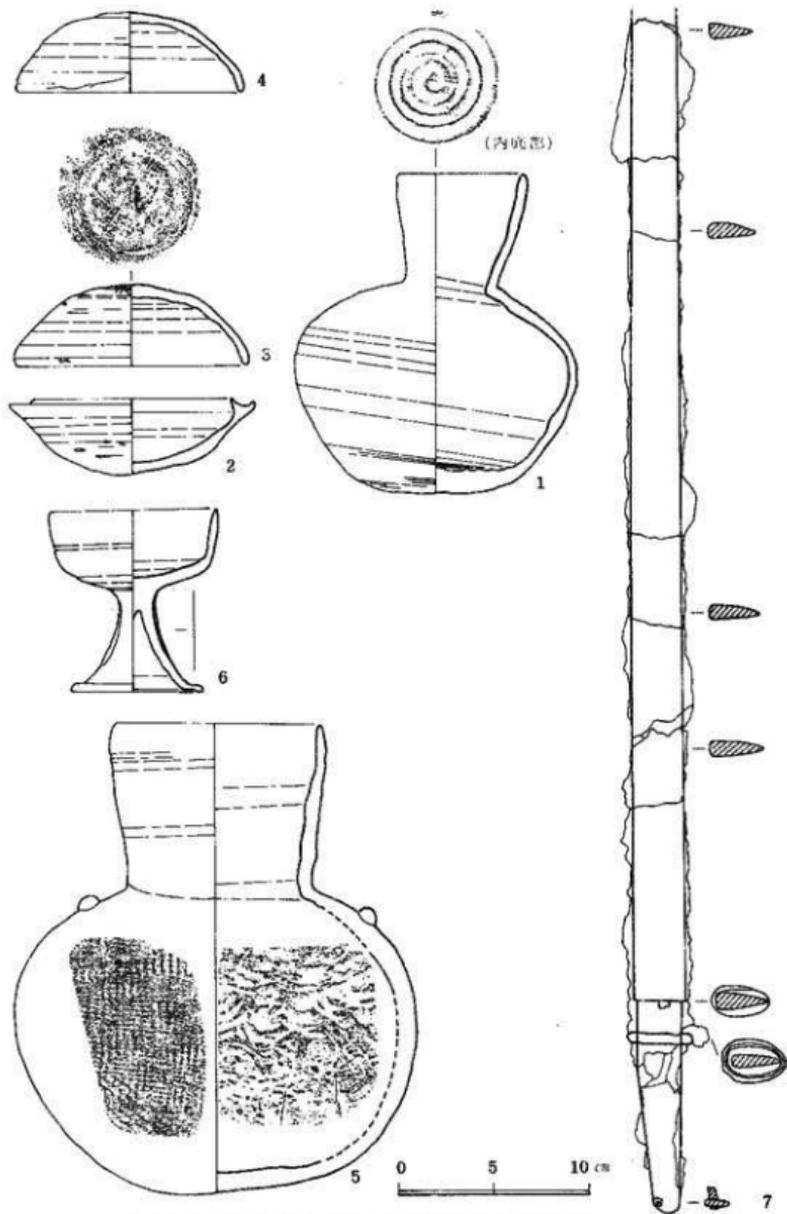
鉄刀（第28図7） 平造りの大刀で、反りはなく、錆化が著しく、数ヶ所に凹塊状の錆が付着する。切先と茎尻が欠失しており、現長は62cmをはかる。刃幅は闊2.7cm、先端2.5cmあり、棟の厚みは柄元で7mm、先端は6mmある。柄元の縁金具は鉄製で幅1.8cm、厚さ1mmあり、鐔は縁金具と柄の間に付くが、厚さ4mmの残欠が柄をとり巻く。茎の長さは11cmで錆化しているが、木質部が残り、目釘をわずかに残す目釘穴が認められる。



横穴模式図と部位名称



第 27 图 尾崎横穴群 第 II 群 5 号穴实测图



第28图 尾崎横穴群 第Ⅱ群5号穴出土遺物実測図

## 第 III 群 横 穴

第 III 群は、第 I 群が分布する両側崖面と稜線を隔てた北側斜面にある。この斜面には旧街道（山道）が通じているが、その山道の西側斜面に開口している 2 基と、ほかに穴全体が陥没しているとみられる地形があり、合わせて 3 基の横穴の存在が認められることから、このグループを尾崎横穴群第 III 群とした。

しかし、この 3 基の横穴を包含する区画は工事区域から外れるために調査は行わず、工区となる西側斜面一帯を試掘対象の区域として、巾 25 m の間に等高線に直交する 8 本のトレンチを入れて調査したが、遺構、遺物は検出されなかった。

## 第 IV 群 横 穴

第 IV 群は、第 I 群 8 号穴の東側から道路沿いに開口する 6 基の横穴群である。

西側から順に、1 号穴から 6 号穴とし、その内、調査を行ったのは、工事予定区域に入る 3 号穴から 6 号穴までである。

調査に先立って、未知の横穴の存在も考えられることから、崖面一帯の調査を行ったが新たな横穴は検出されなかった。

### 3 号 横 穴

過去の道路工事によって、前庭部と羨道は削り取られているが、第 IV 群の中では最もよく原形を留めている。

横穴の主軸は南北方向で、真南に開口し、縦長形で、羨道を左側に寄せている。

奥壁に浅い軒線がみられ、天井部も棟線が残ることから、家形に仕上げる意図があったものと推定される。

各部分の規模は次のとおりである。

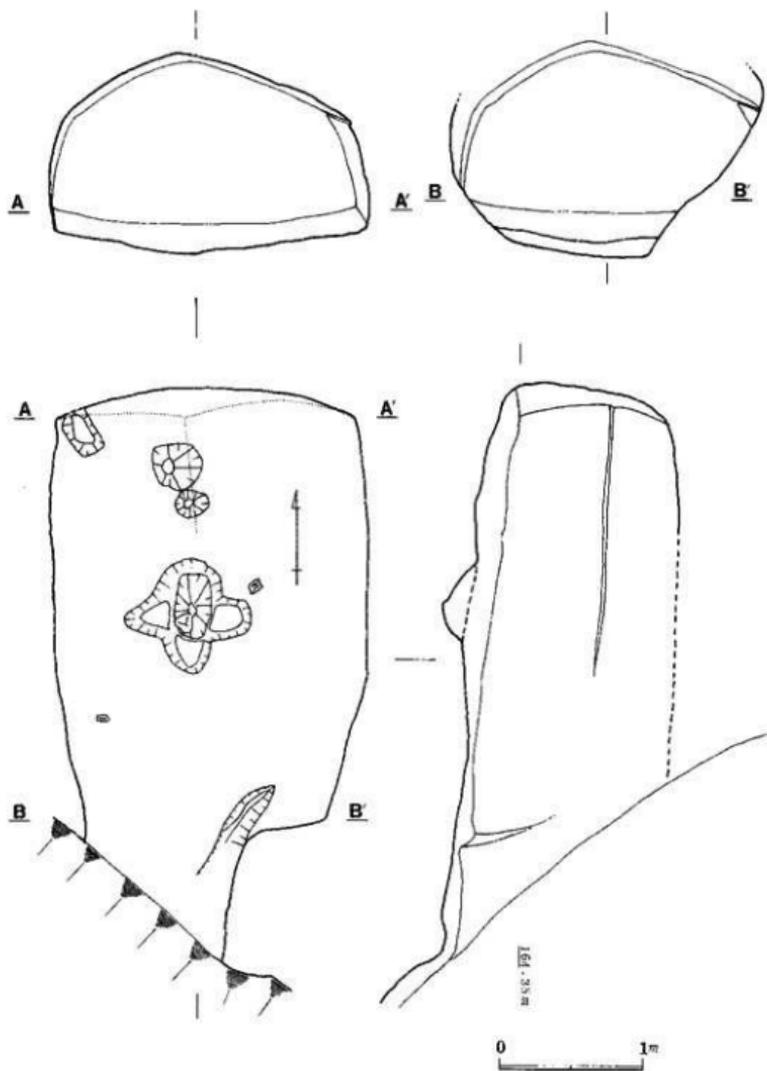
玄室—奥行 3.10 m 幅 1.70～2.20 m 高さ 1.30 m

羨道—長さ 不明 幅 1.10 m

玄室奥壁から玄門までの間は、30 cm の比高差をもって前側に傾斜し、玄室に排水溝は施されていない。周囲の壁面は風化によって全面が剝離しており、掘削時の工具痕は認められなかった。

床の中央には、直径 90 cm、深さ 20 cm の穴があり、底から炭粉が検出されたが、横穴の時期に対応するものではなく、二次的なものと推定した。地元に住む古老の話によると、かつて人が出入しており、焚火をしていたと言う事であった。

遺物は検出されていない。

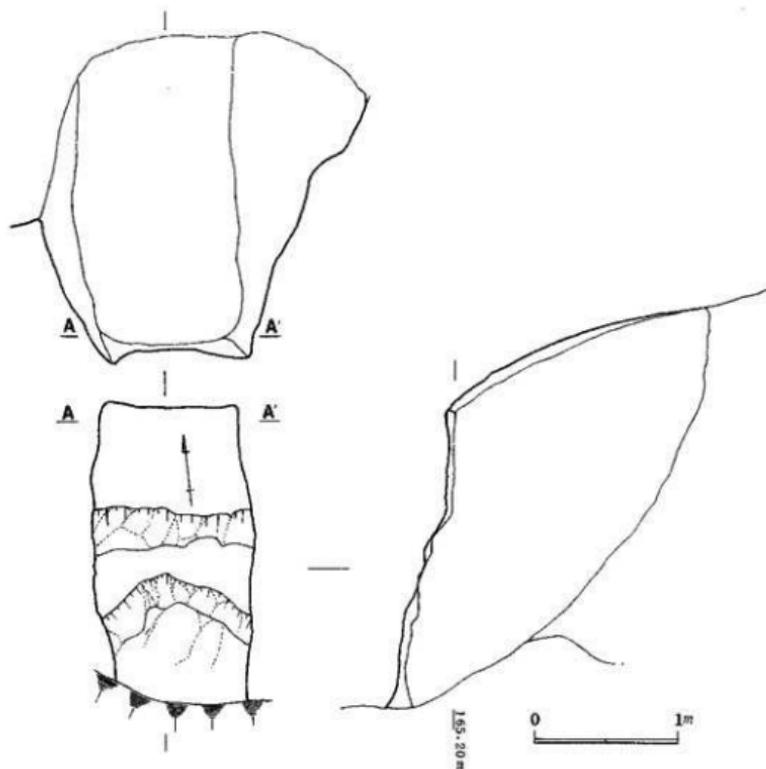


第 29 图 尾崎横穴群 第 IV 群 3 号穴实测图

#### 4号横穴

3号穴との間隔は4m、高低差1mで東側上方にあり主軸をほぼ南北におくもので、未完成の横穴であるが、一応4号とする。発掘の結果天井がなく、正面の壁面が後にたおれていることなどから、前庭部を掘り終った段階で、羨道の施工に着手する直前のものと見ることができる。以後の施工を放棄した事情を推測すると、このまま玄室を掘削した場合、天井部の上方が極めてうすくなることと、地山の岩質がかなりゆるんでいることから、崩落の危険を予測したことによるものと考えられる。

前方は、過去の道路工事によって削り取られているが、残る部分の長さは2mで幅が1.2m、床も施工中途のもので粗雑な面である。遺物は検出されなかった。



第30図 尾崎横穴群 第四群4号穴実測図

## 5号横穴

4号穴より14m東側で、65cm高い位置にある。稜線は東に移るに従って高くなるため、この位置では横穴は斜面のかなり低い位置になる。

発掘前はわずかに開口していたのであるが、排土の結果、過去の道路工事によって、玄室の中心部近くまで削り取られていたことがわかった。

平面プランは奥側にふくらみをもつ隅丸の縦長方形で、断面は丸天井形であるが、奥壁天井の中心には弱い棟線が残っている。

主軸を北西におき、S 35°Eに開口していたものと推定される。

各部分の規模は次のとおりである。

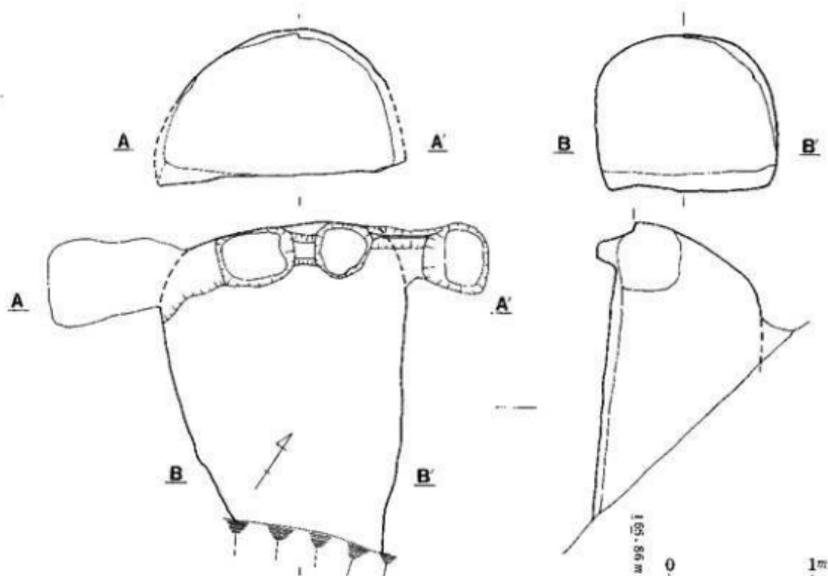
玄室---奥行 2.20m (推定) 幅 1.10~1.70m 高さ 1.10m

床面は玄室奥部から前端までの間に15cmの比高差をもって前に傾斜し、排水溝は施されていない。

この横穴は、かつて手廻りの貯蔵庫として利用されていたものといわれ、奥壁の前側に直径40cm、深さ25cmの窓穴が2ヶ所並び、また奥壁の向翼に張り出した穴が設けられている。

左側は奥行80cm、幅60cm、高さ60cmの長円形で、右側は奥行60cm、幅45cm、高さ50cmのものである。

遺物は検出されなかった。



第31図 尾崎横穴群 第IV群5号穴実測図

## 6号横穴

5号穴の東側に5mの間隔をおいて、10cm上方にある。

5号穴と同じく、工事によって玄室の中はどまで削り取られているが、第IV群の中では最も小型のものである。

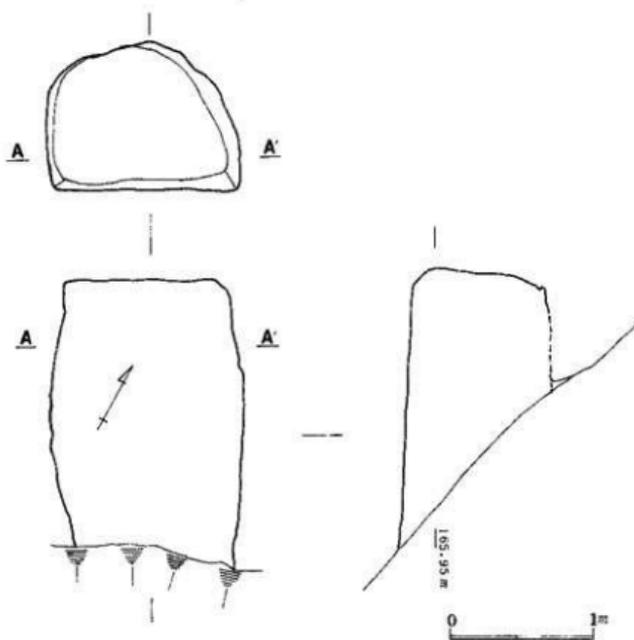
推定できる平面プランは、床面縦長方形の九天井形で、主軸は北西におき、 $S 30^{\circ} E$ に開いている。

残されている部分の規模は次のとおりである。

玄室—奥行 1.90 m (前側は欠失) 幅 1.30 m 高さ 0.90 m

奥壁から前壁までの1.9 mの間は、10 cmの比高差をもって前に傾斜し、排水溝は施されていない。

この横穴は、再利用された形跡はなく、床面は平滑であった。遺物は検出されなかった。



第32図 尾崎横穴群 第IV群6号穴実測図

## 小 結

尾崎横穴群について、調査を行った16穴の概要について記述したが、このほかに渠道下の斜面一帯には、開口している横穴もあり、未知のものを合わせると、まだかなりの数の横穴が存在するものと推定され、本横穴群は丘陵先端部全域に広がる大横穴群である。

本横穴群がもつ歴史的意義について、若干の考察を加えて小結としたい。

本横穴群の形態、規模、加工方法については、グループ毎にいくらかの差異はみられるが、共通する点は、羨道と玄室を細長く仕立てた縦長のもので、天井の形態は岩肌が弛緩しており、崩壊、剝離が著しく不明瞭なものが多かったが、丸天井形が最も多く、テント形がそれに続く。また完全な家形として形成されていないが、軒線と棟線をもつ横穴が2穴あった。

丸天井形は町内の横穴群の中でも最も多くみられるもので、西部出雲地方の地域的特徴とみられている。

テント形のもは、町内の横穴群でも初見のもので、奥出雲地方の特徴(注1)とされている。

家形の横穴は、町内では大塚横穴群(注2)で整正家形が1穴確認されているが、本横穴群では軒線と弱い棟線を持つ丸みをおびた横穴が2穴確認されているが、この家形は、神戸川流域の特徴(注3)といわれていることから、いくらかその影響を受けているとも考えられる。

羨道は玄室の左右のどちらかに寄せたものが多くみられる。

加工方法では、仕上げの段階で、U字型または角型の刃先をもつ工具が使用されている。所見によると、壁面は垂直に掻き下し、床面との界線は工具を床に並行して、連続的に打ち込んでいる。隅などの細かな部分は、ノミ状の工具を使用する傾向がみられる。

埋葬方法に関わることとして、工事等によって破壊されたものを除いて、すべての横穴には人頭大の川石が数個置かれていた。これらの川石は、外部からの流入土と内面の崩落土によって移動しているものが多いが、移動の少ない横穴の、石の配置から推定すると、一つの可能性として、これらの石は棺台または屍を置く台、あるいはそれらのものの固定用に使用したことも考えられる。

閉塞部に、閉塞のために使用したとみられる石が検出された横穴が2穴あった。

出土した須恵器は蓋坏についてみると概ね山陰における須恵器編年(注4)のⅣ期に属するが、Ⅲ期にさかのぼるものもある。輪状ツマミ、乳頭状ツマミをもつもの、かえりをもつものなど新しいものも相伴していることから、構築の時期は、古墳時代後期後半ごろで、6世紀後半から7世紀にかけて、営造されたと思われる。なお、第1群8号穴玄室内の須恵器について一群が玄室奥壁に集積しているのは、追葬に伴う処理の結果と推定される。

出土品の中で特徴的なものとしては、放射状とラセン状の暗文を施した土師器の坏(第1群1号穴)と、かなりの重量感をもつ鉄滓(第2群1号穴)がある。

陪文土器は、西部出雲地方で出雲市の神門寺境内廃寺(注5)から出土しているほかは、この周辺での横穴からの出土例をみない。

また鉄滓について『出雲国風土記』によると、町内を流れる波多川の記述の中で、「鉄有り」としていることから、奈良時代にこの地方で砂鉄を原料とした、鉄生産が行われていたことは明らかである。

横穴から鉄滓が出土した例は、西部出雲では初見のものであり、奈良時代に先立つ古墳時代に製鉄がおこなわれていたことがわかる。

尾崎横穴群の立地は、須佐盆地を一望する高地にあるが、盆地を取り巻いて、そのほか翠松山古墳群、横穴群、高松寺横穴群がある。これら横穴群の被葬者は、小規模な段丘、沖積地の水田を生産基盤としながら、広大な山林と豊富な砂鉄を原料にした「たたら」による鉄生産もおこなっていたことが推測される。

- 注1 三刀屋町教育委員会『東下谷横穴群発掘調査報告書』（1984）  
2 佐田町教育委員会『佐田町の遺跡・東須佐』（1987）  
3 出雲市教育委員会『半分城跡横穴群発掘調査報告書』（1979）  
4 山本清『山陰の古墳文化の研究』所収・1971）  
5 勝部昭『隠岐島の古墳』（『山本清先生喜寿記念論集・山陰考古学の諸問題』所収・1986）



8号穴出土遺物の清掃作業（取上げ前）

出 土 器 一 覽 表

(図版番号はPL 22~PL 29参照)

図版番号	器 種	法 量		色 調		胎 土	焼成	ロ ヲ 回転方向	破 損 状 況	備 考
		口径 cm	器高 cm	内側	外側					
I-1-1	土 師 器 罎  坏	16.2	4.8	赤褐色	赤褐色	緻 密	良	左回転	完 形	坏の内部に暗文を施す
2	高 罎	9.4	9.5	黒灰色	黒灰色	普 通	普通	左回転	口縁 $\frac{1}{8}$ 欠損	色調変化、自然釉
I-2-4	蓋	12.5	4.3	紫灰色	紫灰色	緻 密	普通	右回転	口縁 $\frac{1}{8}$ 欠損	ヘラ記号× 自然釉付着
5	坏	11.2	3.9	灰色	暗灰色	やや密、少量の砂粒混り	良	右回転	完 形	ヘラ記号×
6	蓋	14.3	4.5	暗灰色	暗灰色	粗粒、3mm大の砂粒混り	普通	左回転	口縁一部欠損	ヘラ記号×
7	坏	11.5	4.1	茶灰色	茶灰色	粗粒、3mm大の砂粒混り	普通	右回転	$\frac{1}{8}$ 欠損	
10	蓋	12.1	4.6	焦褐色	暗灰色	粗粒、砂粒混り	良	右回転	完 形	自然釉、石灰分付着
9	坏	11.5	4.7	焦褐色	灰色	粗 粒	良	右回転	口縁一部欠損	ヘラ記号× 全体に自然釉
14	坏	10.2	3.0	灰色	灰色	やや粗粒	普通	左回転	$\frac{3}{8}$ 欠損	
11	蓋	9.9	4.4	灰色	焦褐色	密	良	右回転	完 形	乳頭状ツマミ
2	高 罎	11.9	8.7	灰色	灰色	密	良	右回転	完 形	色調変化
1	提 瓶	6.1	20.3	黒灰色	黒灰色	やや粗粒	良	左回転	口縁一部欠損	ヘラ記号/ 肩部に1横の突起
3	卍	9.3	14.2	灰色	灰色	粗粒、石灰混り	普通	右回転	口縁 $\frac{1}{8}$ 欠損	
12	平 罎	7.1	16.6	焦茶色	焦茶色	緻 密	普通	右回転	頸上 $\frac{3}{4}$ 、蓋部 $\frac{1}{4}$ 欠損	ヘラ記号 → 肩部に2横の突起
8	台付罎	9.2	16.0	灰色	灰色	密、2mm大の砂粒混り	普通	右回転	頸上 $\frac{2}{3}$ 欠損	自然釉剥離
I-4-1	蓋	8.7	2.8	青灰色	暗灰色	やや粗粒	普通	右回転	完 形	輪状ツマミ
5	坏	10.8	4.3	焦褐色	灰色	密	良	右回転	完 形	

図版番号	器種	法量		色調		胎土	焼成	クロ 回転方向	破損状況	備考
		口径 cm	器高 cm	内側	外側					
3	埴	8.7	14.6	黒灰色	黒灰色	やや粗粒	普通	左回転	口縁 $\frac{1}{6}$ 欠損	自然釉
4	坏	8.8	3.7	紫灰色	灰色	緻密	普通	右回転	口縁一部欠損	ヘラ記号× 自然釉
2	白 長 頸 壺	9.0	23.1	黒色	黒灰色	粗粒、7mm大の砂粒混り	良	右回転	口縁 $\frac{3}{4}$ 欠損	胴部に3層のスカシ入り
1-5-6	壺	11.3	4.1	黒灰色	黒灰色	やや粗粒	良	左回転	完形	自然釉
7	蓋	12.5	4.1	灰色	灰色	緻密、3mm大の砂粒混り	良	右回転	完形	
9	蓋	12.7	4.0	淡灰色	淡灰色	緻密	普通	右回転	口縁 $\frac{1}{8}$ 欠損	
3	坏	10.8	3.5	暗灰色	暗灰色	緻密	普通	右回転	$\frac{1}{2}$ 欠損	自然釉
5	坏	10.9	3.8	淡褐色	灰色	緻密、7mm大の砂粒混り	普通	右回転	完形	
8	坏	10.8	3.9	黒茶	黒茶	やや粗粒	普通	右回転	完形	
4	埴 瓶	9.9	22.1	紫灰色	灰色	やや粗粒	普通	右回転	口縁一部欠損	肩部に2個の突起
10	大形埴 瓶	13.4	26.7	黒灰色	灰色	緻密	普通	左回転	口縁 $\frac{2}{3}$ 欠損	自然釉付着 全体に気泡がで多い割離部分
1-6-11	蓋	7.8	3.4	暗灰色	暗灰色	緻密	普通	右回転	完形	乳頭状ソマリ ヘラ記号× 石区分付着
6	坏	8.6	3.2	暗灰色	暗灰色	緻密	普通	右回転	完形	ヘラ記号×
12	坏	10.1	4.2	灰色	灰色	粗粒	普通	右回転	口縁 $\frac{1}{6}$ 欠損	ヘラ記号× 自然釉
13	蓋	9.0	3.2	暗灰色	暗灰色	粗粒	普通	右回転	口縁一部欠損	
17	蓋	9.6	3.6	黒褐色	紫褐色	粗粒	普通	右回転	完形	
14	坏	9.3	3.5	紫褐色	灰色	密	普通	左回転	完形	ヘラ記号×
15	坏	8.5	3.2	茶灰色	茶灰色	粗粒	普通	左回転	完形	
2	高 坏	9.4	8.9	灰色	灰色	やや密	良	右回転	口縁一部欠損	色調変化、全体に石区分付着

4	高	坏	9.5	7.2	暗灰色	暗灰色	緻密	普通	右回転	頸上 $\frac{1}{2}$ 欠損	脚部スカシ入り
16	高	坏	9.7	8.4	灰色	暗灰色	やや粗粒	良	右回転	口縁 $\frac{1}{8}$ 欠損	
3	平	瓶	6.5	17.0	紫褐色	紫褐色	緻密	普通	左回転	完形	ヘラ記号× $\frac{1}{2}$ 石灰分付着
1	高	坏	15.0	9.7	暗灰色	暗灰色	やや粗粒	良	左回転	完形	色調変化 $\frac{1}{3}$ 石灰分付着
5	高	坏	14.9	10.2	暗灰色	暗灰色	粗粒、細砂粒混り	良	右回転	完形	全体に薄く石灰分付着
7	高	坏	14.5	9.4	暗灰色	暗灰色	緻密	良	左回転	完形	脚部スカシ入り
8	高	坏	14.1	11.3	暗灰色	暗灰色	やや緻密	良	左回転	完形	脚部スカシ入り
I-8-1		蓋	13.0	4.4	茶灰色	茶灰色	粗粒	良	右回転	完形	色調変化
2		蓋	13.2	4.1	茶灰色	青灰色	粗粒	良	左回転	完形	
4		蓋	13.2	4.3	茶灰色	黒灰色	粗粒	普通	右回転	完形	
9		蓋	12.9	4.1	青灰色	青灰色	粗粒	普通	右回転	完形	ヘラ記号×
11		蓋	13.3	4.6	淡褐色	淡褐色	粗粒	普通	右回転	完形	自然釉
12		蓋	11.9	4.6	青灰色	青灰色	緻密	良	右回転	完形	
14		蓋	12.3	4.4	青灰色	緑灰色	粗粒	普通	左回転	口縁 $\frac{1}{6}$ 欠損	
15		蓋	12.7	4.2	茶灰色	暗灰色	粗粒、3mm大砂粒混り	良	右回転	完形	一部に石灰分付着
17		蓋	11.6	4.1	紫灰色	紫灰色	緻密	良	右回転	完形	
18		蓋	12.5	3.9	紫灰色	紫灰色	粗粒	良	右回転	一部欠損	ヘラ記号× $\frac{1}{6}$ 石灰分付着
20		蓋	12.3	4.6	紫褐色	灰色	緻密	普通	左回転	完形	
21		蓋	12.5	4.4	黒灰色	黒灰色	粗粒	普通	右回転	完形	石灰分付着
24		蓋	13.0	4.4	青灰色	茶灰色	粗粒	普通	右回転	口縁一部欠損	色調変化
30		蓋	12.7	4.7	灰色	灰色	緻密	普通	右回転	完形	

図版番号	器種	法量		色調		胎土	焼成	ク ロ 回 転 方 向	破損状況	備考
		口径 cm	器高 cm	内側	外側					
3	坏	11.4	4.4	茶灰色	淡灰色	粗粒	良	左回転	完形	全体に自然釉
31	坏	11.9	4.1	青灰色	暗灰色	やや密	良	右回転	完形	自然釉
5	坏	11.5	4.5	黒灰色	焦茶灰色	粗粒	良	右回転	完形	自然釉、石灰分付着
7	坏	10.8	3.6	焦茶灰色	焦茶灰色	粗粒	良	右回転	完形	一部自然釉
8	坏	10.5	3.7	青灰色	青灰色	粗粒	良	右回転	口縁一部破損	
10	坏	10.4	3.9	紫灰色	紫灰色	やや密	普通	右回転	完形	一部自然釉
16	坏	10.4	3.5	灰色	灰色	粗粒	良	右回転	完形	自然釉
19	坏	10.6	3.7	灰色	灰色	緻密	普通	右回転	完形	口縁の一部に石灰分付着
22	坏	11.1	4.0	灰色	灰色	粗粒、4mm大の石英混り	良	右回転	完形	自然釉、石灰分付着
23	坏	11.2	4.3	淡灰色	黒灰色	粗粒	良	右回転	完形	自然釉 気泡による凹凸が顕著
25	坏	11.7	4.2	茶灰色	茶灰色	粗粒	良	右回転	完形	自然釉、石灰分付着
26	坏	11.1	4.5	暗灰色	灰色	やや密	普通	左回転	完形	
27	坏	10.6	4.0	青灰色	青灰色	粗粒	普通	右回転	完形	
13	高坏	15.1	10.0	黒灰色	黒灰色	粗粒	普通	右回転	完形	脚部スカシ入り
6	埴	7.9	11.1	焦茶灰色	焦茶灰色	やや緻密、細砂粒混り	良	右回転	完形	
28	高坏	15.1	9.9	黄灰色	黒灰色	粗粒	良	左回転	口縁一部欠損	脚部スカシ入り 口縁と脚部の一部に石灰分付着
29	横瓶			灰色	灰色	緻密	良	右回転	頸上欠損	外側全体にハケ目
II-1-1	蓋	12.7	3.1	淡灰色	淡灰色	やや粗粒	普通	左回転	口縁1/3欠損	輪状ツマミ
2	坏	13.5	5.2	淡灰色	淡灰色	粗粒	普通	左回転	完形	

3	長頸蓋	7.4	18.2	集粉色	集粉色	緻密		良	右回転	口縁 $\frac{1}{2}$ 割一部欠損	肩部に2個の突起
II-2-2	環	10.4	3.9	灰色	灰色	細密、粗砂粒混り		良	右回転	完形	
3	環	10.4	4.0	青灰色	青灰色	粗粒		普通	右回転	完形	ヘラ記号→
5	埴	6.9	10.0	集粉色	暗灰色	緻密		普通	右回転	頸上 $\frac{1}{2}$ 欠損	自然釉
1	高環	13.1	8.9	暗灰色	暗灰色	粗粒		良	右回転	口縁一部欠損	
4	高環	12.6	8.6	暗灰色	暗灰色	やや緻密		良	右回転	口縁 $\frac{1}{6}$ 欠損	
II-3-2	蓋	13.0	4.4	淡灰色	灰色	粗粒		良	右回転	口縁一部欠損	自然釉
1	環	10.5	4.0	灰色	灰色	やや密		良	右回転	口縁一部欠損	色調変化
3	高環	8.9	9.2	灰色	灰色	やや密		良	右回転	口縁一部欠損	色調変化
4	土師土器環	15.7	5.8	黄褐色	黄褐色	緻密		普通	右回転	口縁 $\frac{1}{2}$ 欠損	埋土中より出土
5	大蓋			灰色	暗灰色	緻密					
II-5-3	蓋	12.0	4.2	灰色	灰色	やや粗粒		良	右回転	完形	ヘラ記号→
2	環	10.3	4.0	灰色	灰色	普通		普通	右回転	完形	
1	平瓶	6.5	16.6	灰色	灰色	やや粗粒		普通	左回転	頸上欠損	石灰分付着
4	蓋	11.7	4.2	灰色	灰色	普通		良	右回転	完形	ヘラ記号→
6	高環	8.7	9.6	灰色	灰色	普通		良	右回転	脚部 $\frac{1}{6}$ 欠損	
5	直口蓋	10.7	24.7	灰色	灰色	普通		普通	左回転	口縁一部欠損	内側にタタキ目 肩部に2個の突起 外側にハケ目とタタキ目

## V 稜線上の墳丘

発掘調査前の詳細分布調査によって、横穴が築造されている丘陵の稜線上40mの間に長径が6m～8mの大小3基の長円形のマウンド状の高まりがあり、これを古墳群と推定していた。

第1次の発掘調査の際に、西端の3号墳と呼ぶ高まりの西側裾部を発掘した結果、マウンドを取り巻く形で、地山を削り取った周溝を検出し、その近くで須恵器片（大壺1個体分）が密集する土器だまりをみたことにより、これらを古墳群と考えたのである。

これらの遺跡は、全体的には工区外となるため、発掘調査の対象としなかったのであるが、東端にある1号の一部分は工区に入るので、この部分の発掘調査を行った。

その結果、墳丘とみられる部分には盛り土がなく、外周が削りこまれた岩盤の高まりで、古墳ではないことが明らかとなった。1号から3号までの墳丘は、横穴群の後背墳丘とみられる(注1)。

### 第1墳丘

人工的に削り残されたとみられる墳丘の頂部には、小型のすり鉢状の穴が数カ所と、マウンド東側の砂岩の地山には、長径1m、深さ40cmの長円形の土坑状の穴が掘られ、内部には角型の刃先をもつ鍬状のもので掘削された工具痕が認められた。

その東側には、半円を描いて北側の斜面に深く落ちる溝が検出された。また、続く東側には地山を大きく半円形に深く掘り下げた区画が検出された。

その区画は、深さは1.20mで、底面には大小のレンズ状の凹み穴が不規則に掘られており、その凹み穴の深さはさまざまであった。

これらの穴には、10cm～15cmのU字型の刃先をもつ鍬状のもので掘削された痕が認められ、切合いの状況からみて、周辺から順次、位置を変えながら掘り変えられたものと推測される。

これらの区画穴の堆積土には、土色による層序関係は認められなかった。このことから、これらの穴は、ある時期に一齐に掘り立てられた、という推定も成り立つ。

この穴の内部及び周辺からは、遺物等は検出されなかった。

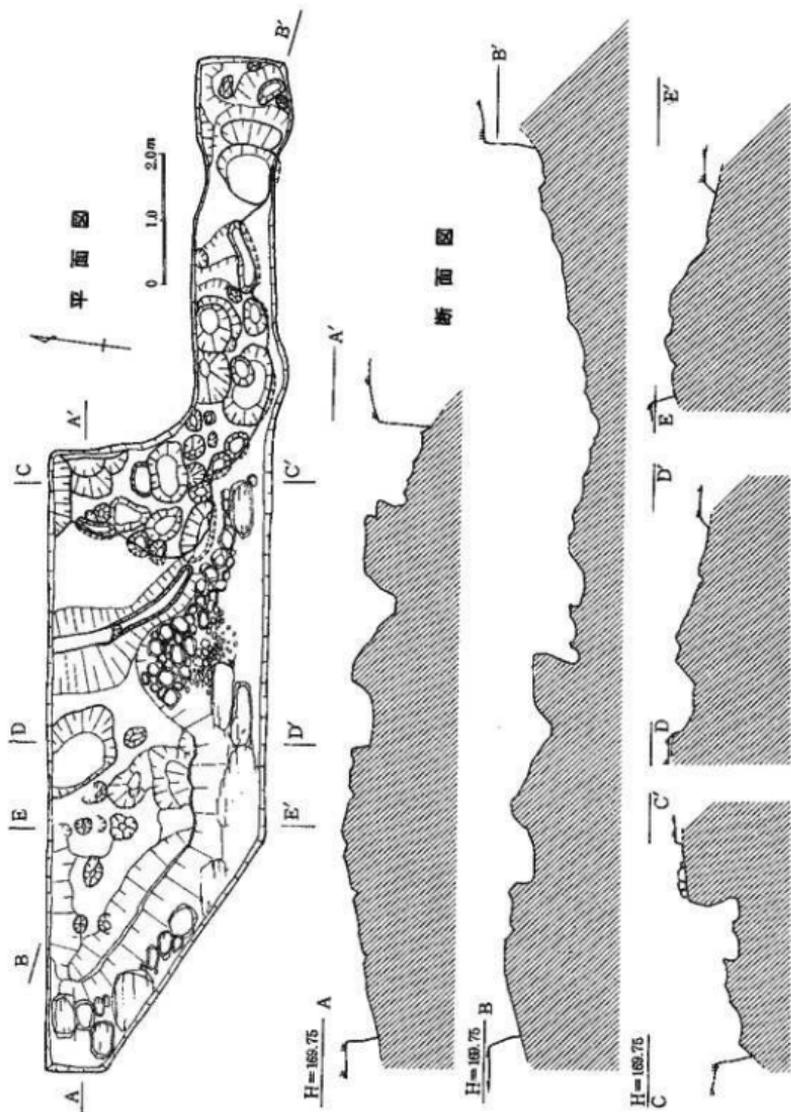
### 第3墳丘

この墳丘の調査は工区外となり、私有地であるため、西側の一部発掘にとどめたが、第1墳丘の調査結果から推定して、この墳丘も岩盤を削った高まりであることが、ほぼ確実視された。墳丘西側の発掘によって得た知見では、墳丘を取り巻く形で周溝が設けられ、その周溝の線上に直径1m、深さ50cmのすり鉢状の穴が掘られている。

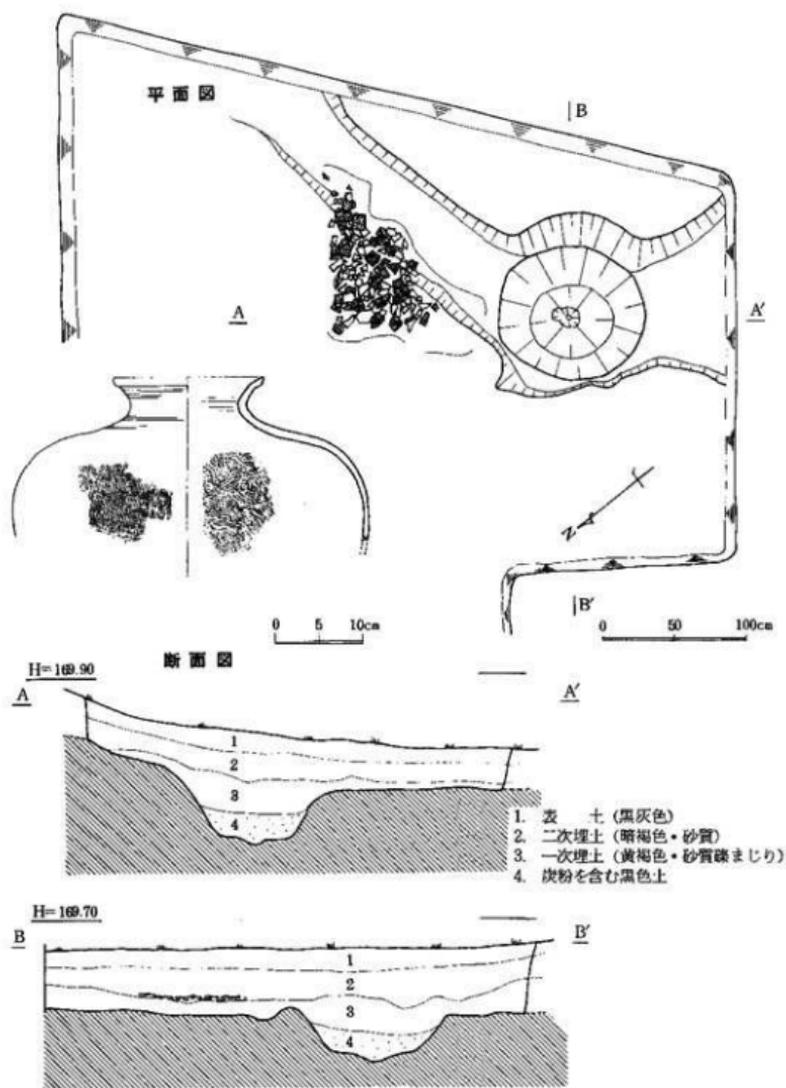
穴の内面は焼結して赤褐色を呈し、かなり高温で熱せられたと考えられ、底部からは炭粉まじりの黒色土が検出された。

また、すぐ近くの第1次埋土層からは、須恵器片を敷きつめた土器だまりが検出された。この須恵器片は、欠失した部分があるが、大壺のほぼ1個体分であった。

この区画においてトレンチを西側に延長して調査したが、その他の遺構、遺物は検出されなかった。



第33圖 尾崎樁穴群 第1墳丘遺構平面圖



第34図 尾崎横穴群 第3墳丘西側遺構実測図

## 小 結

横穴群が展開する区域の稜線上にある3か所の墳丘は、発掘調査の結果、古墳ではなく、砂岩質の地山に大小のピット、溝などを掘り込んだ、横穴群に伴う後背墳丘であろうと推測される。

第1墳丘の東側に集中する穴からは、遺物等は検出されず、穴の性格、時代など不明であるが、少くともここが埋葬を目的としたものではないことは明らかである。

第3墳丘については、西側にある穴の直近で、大壺1個体分の須恵器が検出されたことからこれらの穴は横穴の時代に対応するものと推定される。

遺構について、あえて1つの仮説を想定してみると、古墳時代に該当するもので、丘陵上面に設けられた大小の穴などは、その下方斜面に展開する横穴についての葬送と、何らかの関わりをもつ儀礼をとりおこなったものと考えられる。

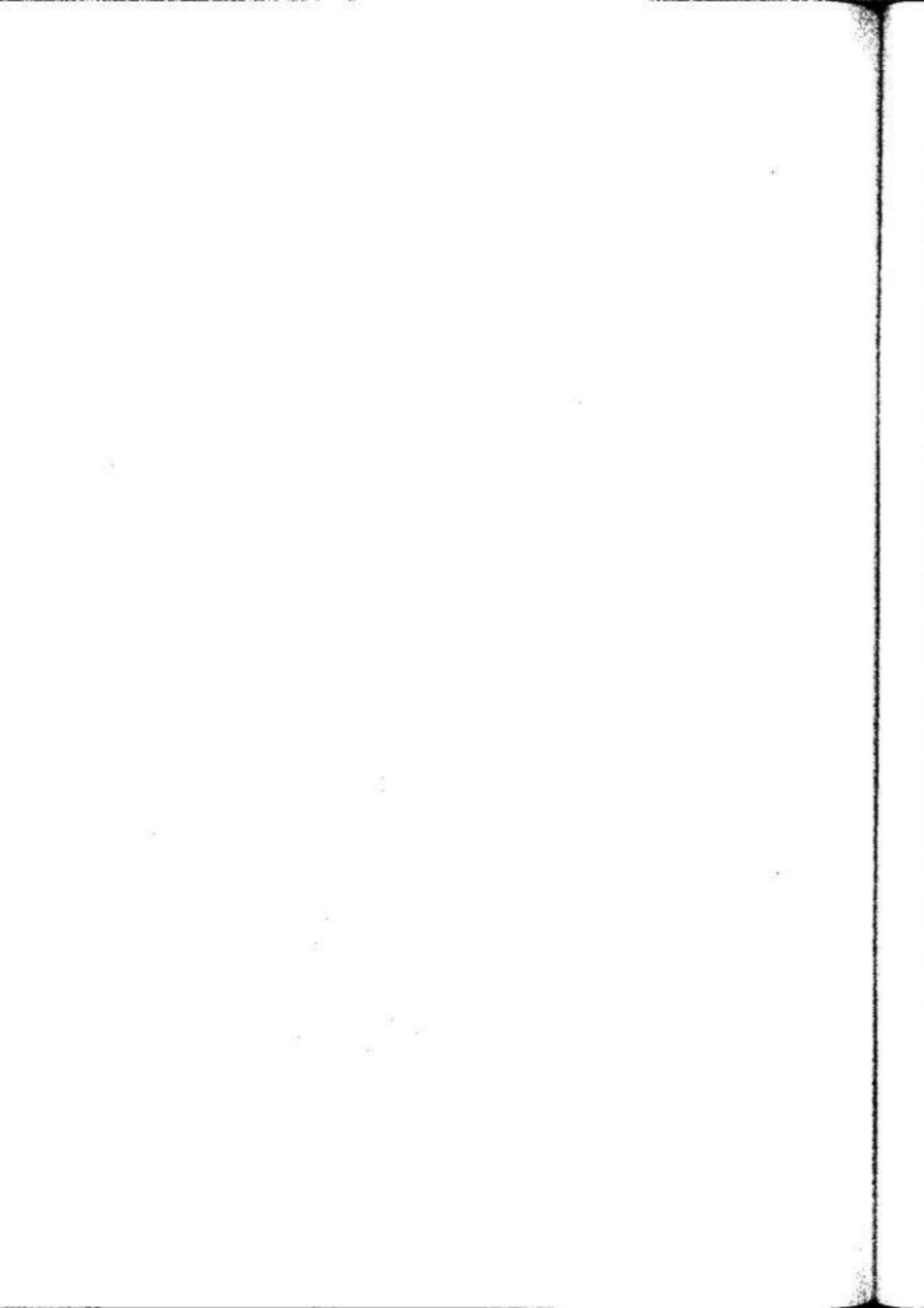
これまで、墳丘をもつ横穴は北九州、周防、山陰で確認されており(注1)今後、注意すべき問題であろう。

注1 中原齊、西浦口出夫「背後墳丘・周溝を有する横穴墓について」

(『大塔山横穴墓群』(財)鳥取県教育文化財団1987)

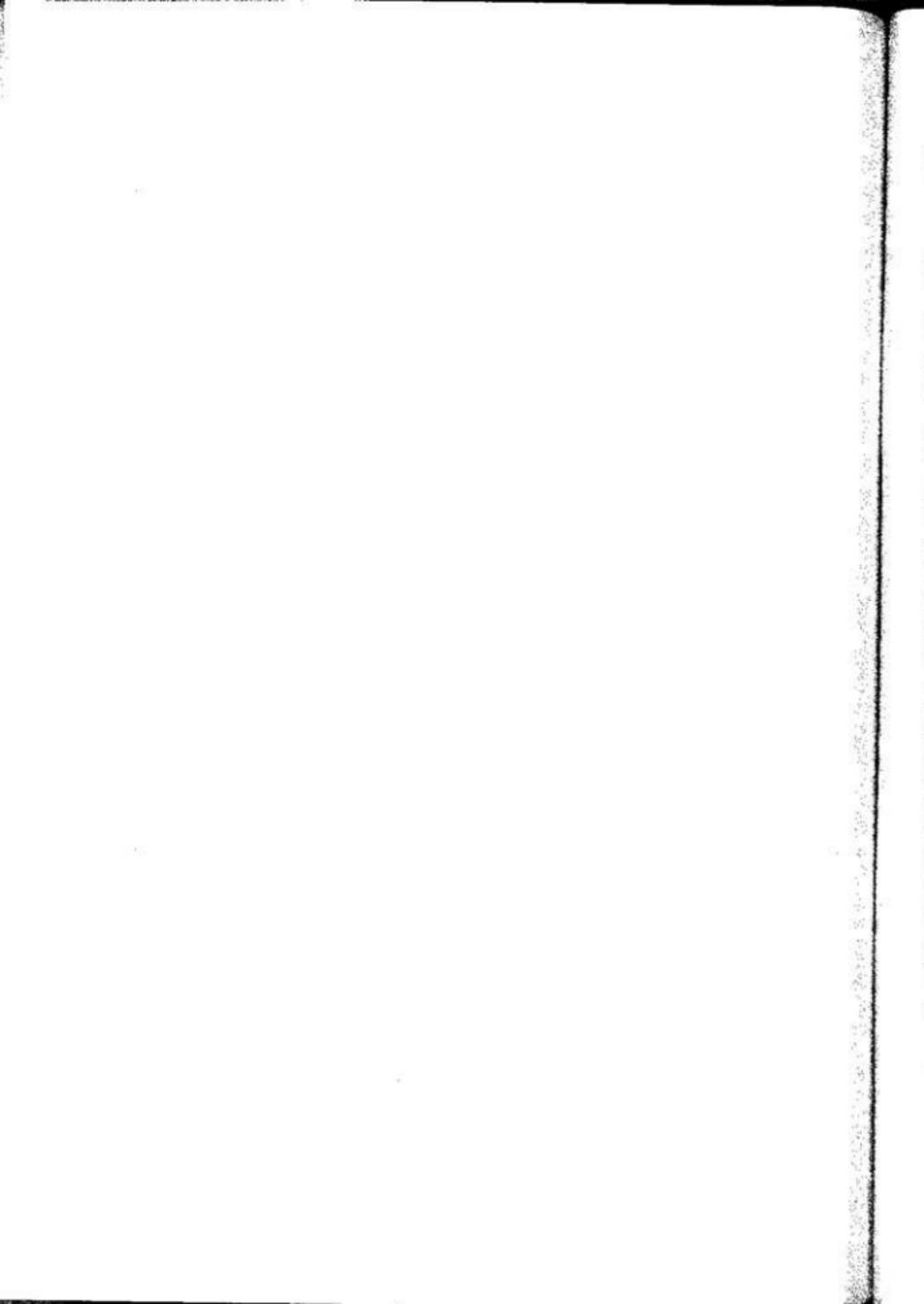


第1墳丘 岩盤に掘られた大小の穴



圖

版





△ 尾崎横穴群の遠景（北側より）



△ 尾崎横穴群の遠景（南側より）



△ 第I群発掘調査前



△ 第I群発掘調査後



△ 第Ⅱ群 発掘調査前（上部は堤道）



△ 第Ⅱ群 発掘調査後



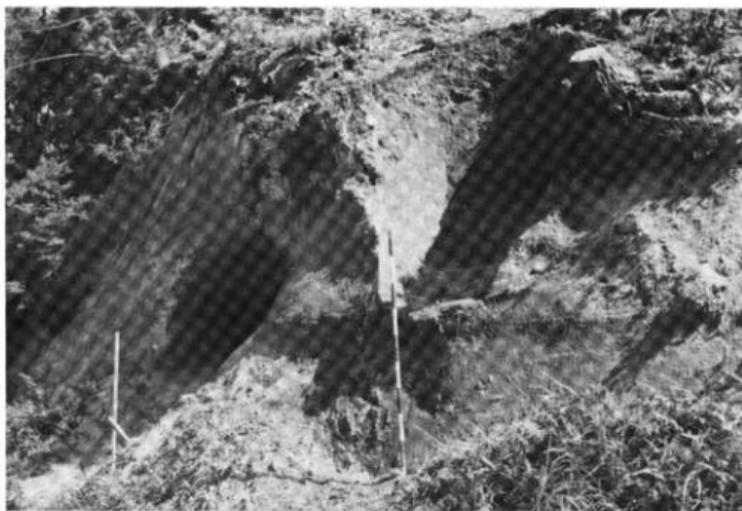
△ 第Ⅲ群 試掘トレンチ（西側より）



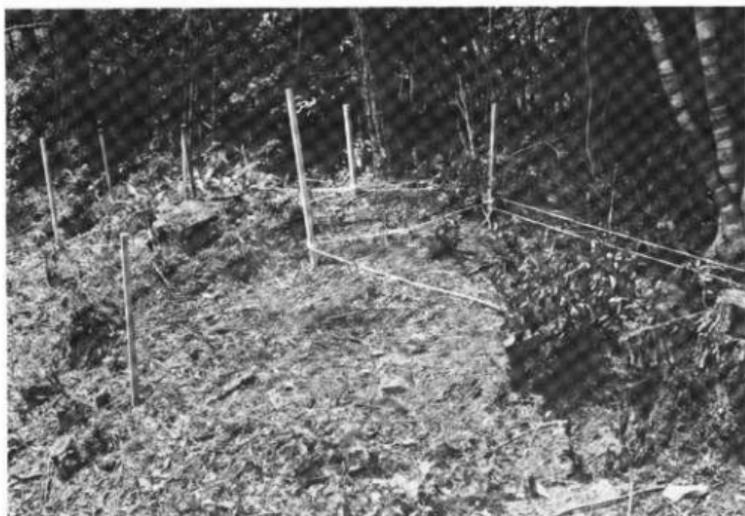
△ 第Ⅲ群 試掘トレンチ（東側より）



△ 第IV群の遠景(南東の道路上から)



△ 第IV群の3号穴(左側)と4号穴



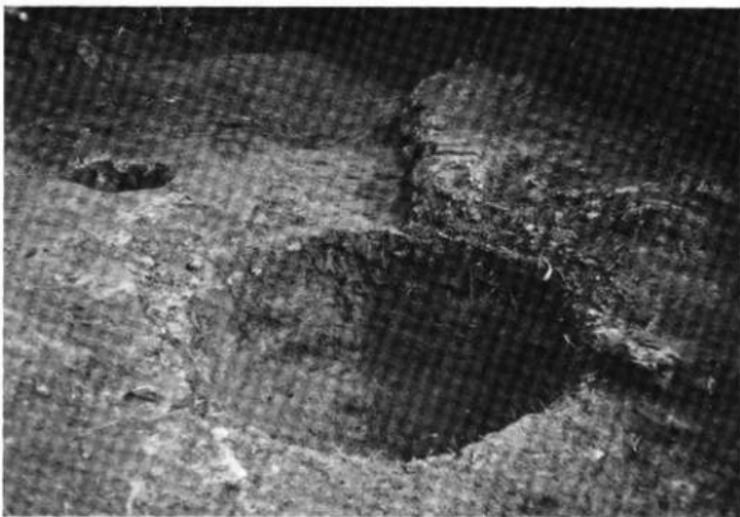
△ 検線上の遺構、第1墳丘付近の発掘調査前（東側より）



△ 第1墳丘の発掘調査後



△ 第3墳丘西裾で検出された土器だまり



△ 第3墳丘西裾で検出された「すり鉢状穴」



△ 第I群 1号穴内側から玄門、羨道をみる



△ 1号穴羨道より奥壁をみる



△ 2号穴正面全景

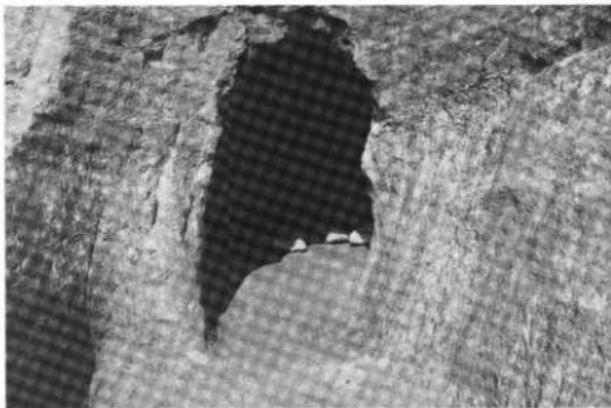
▽ 2号穴玄室



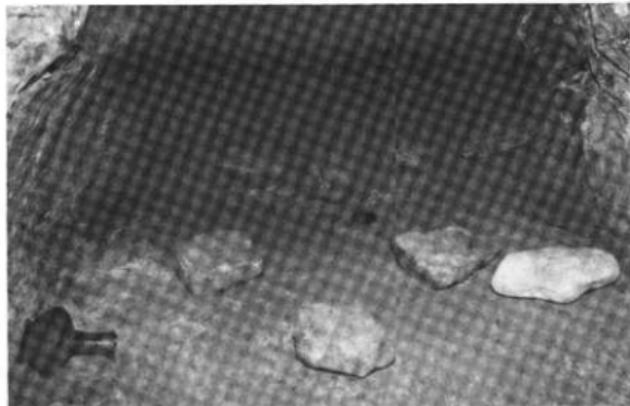
△ 3号穴正面全景（左側）と4号穴後門



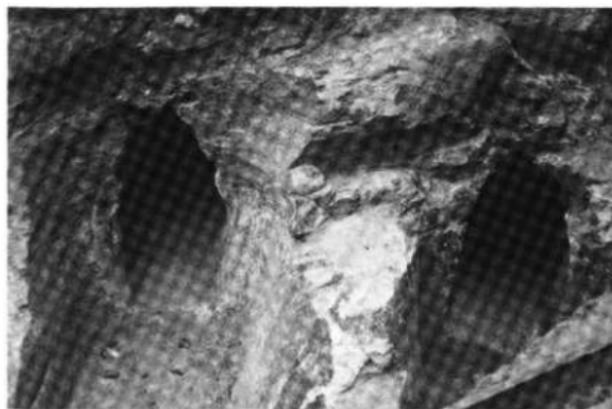
△ 3号穴の玄室



▽ 4号穴の狭道



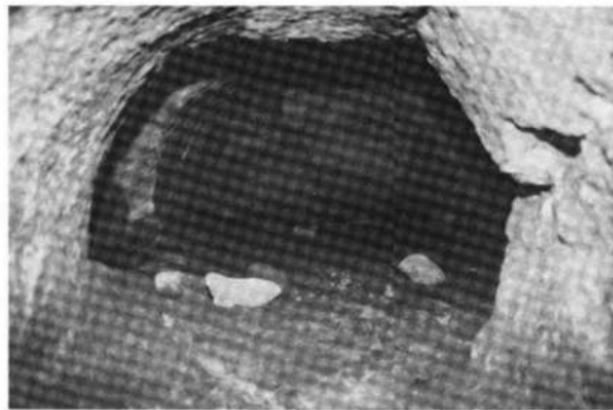
△ 4号穴の玄室、遺物出土状況



△ 5号穴（左側）と  
6号穴の狭門



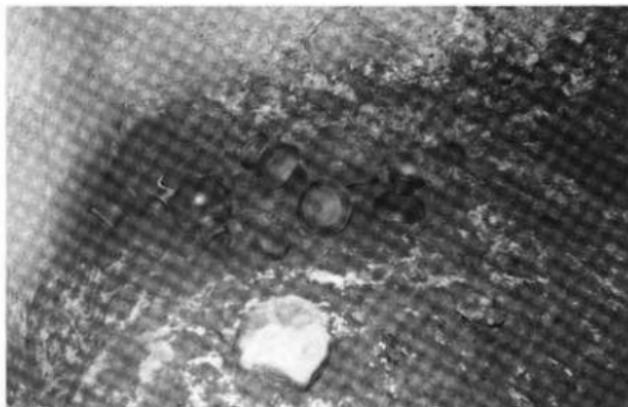
▽ 5号穴の玄室



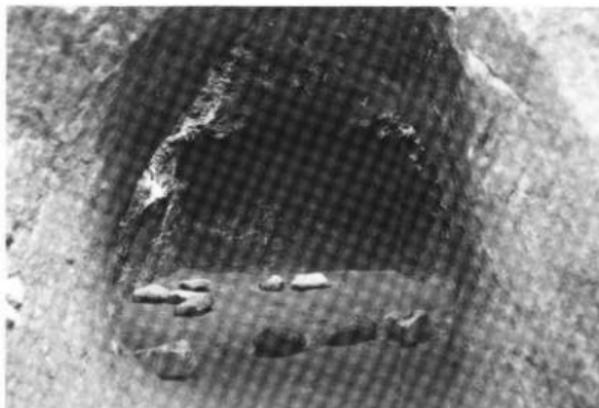
△ 6号穴の玄室  
左側に5号穴との隔壁  
の崩れた部分が見える



△  
▽  
6号穴玄室内の  
遺物出土状況



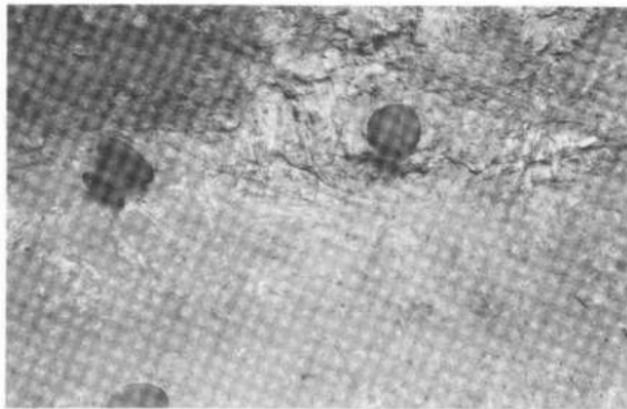
△  
▽  
8号穴の排土作業



△ 8号穴玄室内部



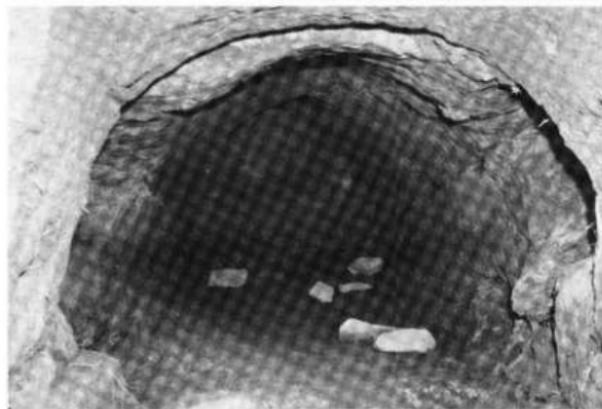
8号穴の  
遺物出土状況 △



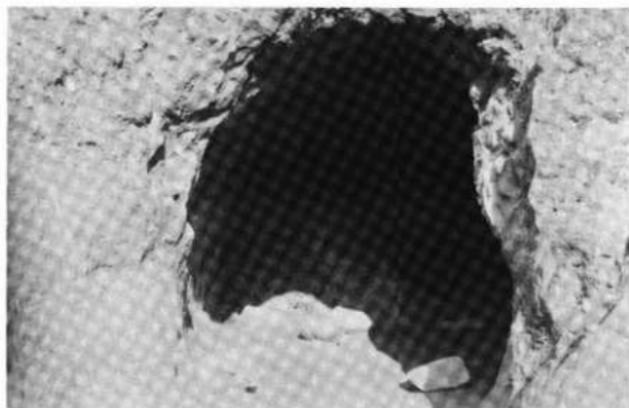


△ 第Ⅱ群 1号穴後門

▽ 遺物出土状況



△ 1号穴玄室内部



◁ 2号穴羨門

遺物出土状況 ▷

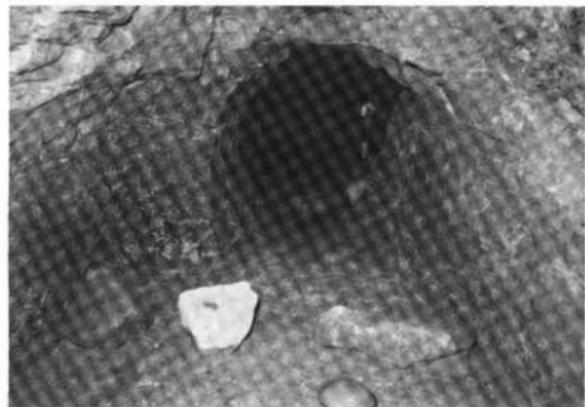


◁ 2号穴玄室内部

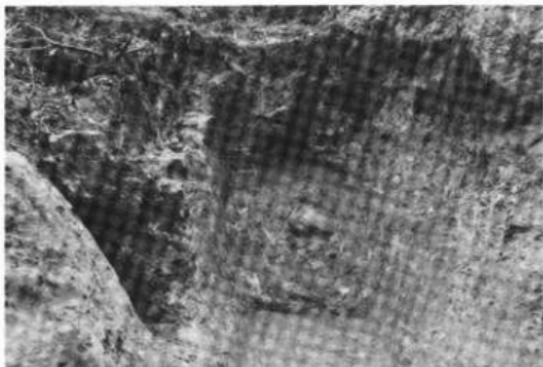


△ 3号穴後門

遺物出土状況 ▷



△ 玄室内から後門をみる



△ 4号穴開口前の状況  
左に見える穴は3号穴玄室奥に通ずる

開口後の状況 ▽



▽ 玄室奥壁に積み上げた石





◁ 5号穴正面の全景  
玄室は旧県道の直下  
に入る

玄室内から羨門▷  
をみる

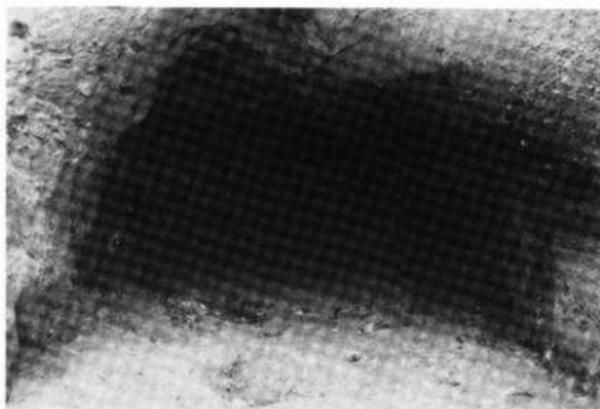


△  
玄室内遺物の出土状況



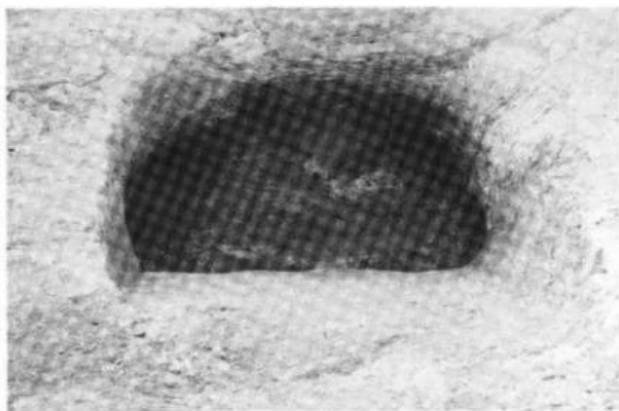
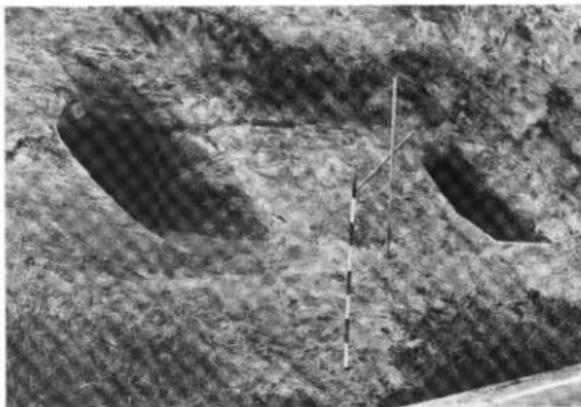
△ 第IV群3号穴(左側)  
と4号穴の掘土作業

3号、4号穴の掘土  
完了後の状況



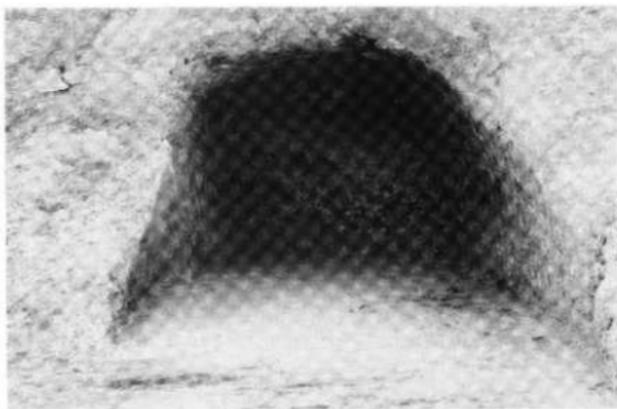
△ 3号穴玄室内部

第IV群5号穴(左側)▽  
と6号穴



△ 5号穴正面  
奥壁下と両側に  
2次のな穴(貯  
蔵穴)がある

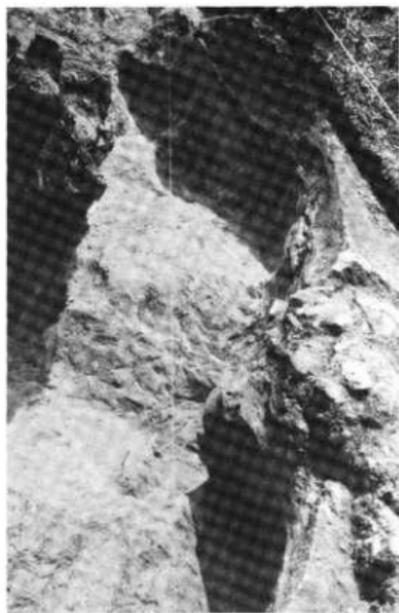
6号穴正面▽



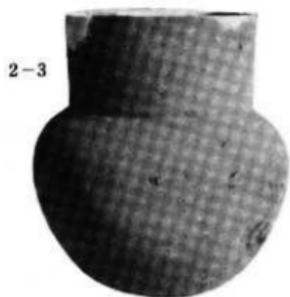


△ 第1墳丘発掘トレンチ（東側から）

発掘トレンチ（西側から）▷



◁ 東側の穴の底部で、明らかな  
工具痕がみられる

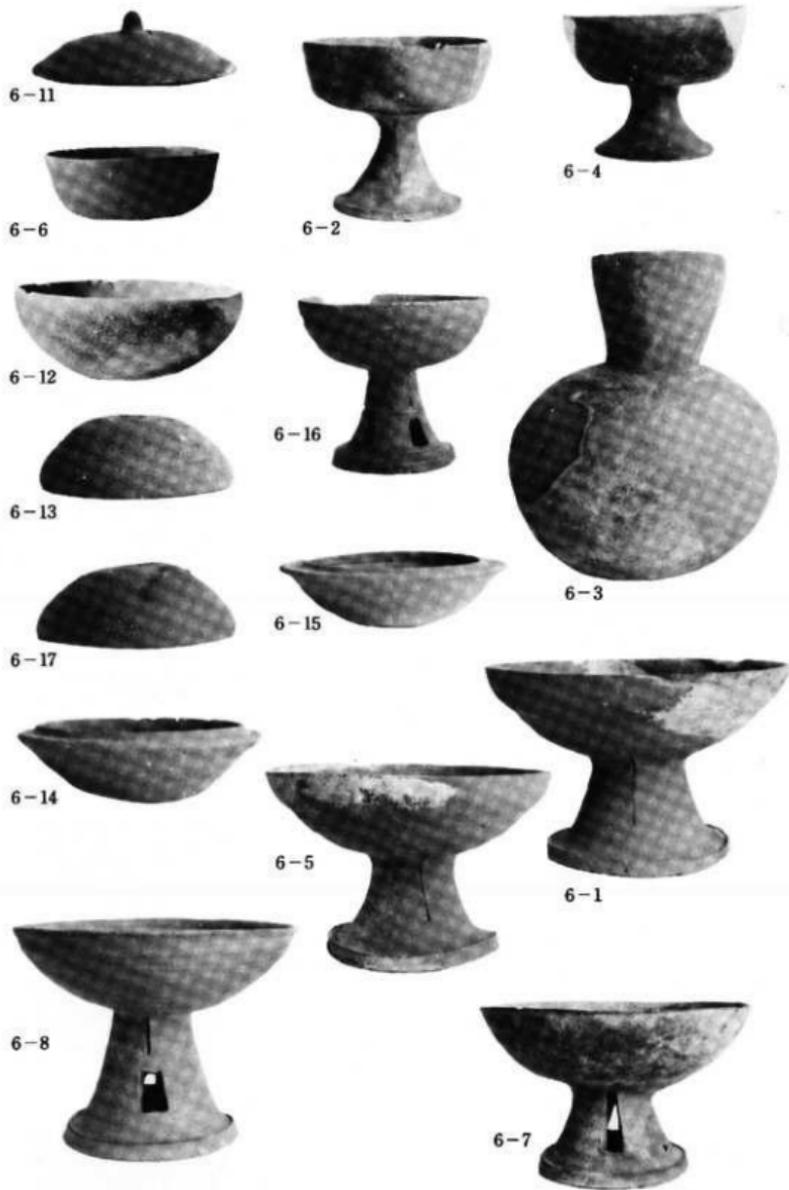


尾崎横穴群第I群1、2号穴出土遺物(1)

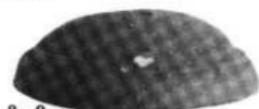


尾崎横穴群第I群2、4号穴出土遺物(2)





尾崎横穴群第 I 群 6 号穴出土遺物(4)



8-9



8-1



8-2



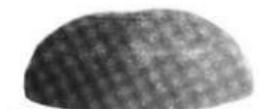
8-4



8-11



8-12



8-14



8-15



8-17



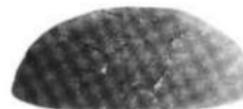
8-18



8-20



8-21



8-24



8-30



8-3



8-31



8-5



8-7



8-8



8-10



8-16



8-19



8-6



8-22



8-25



8-23



8-26



8-28



8-27



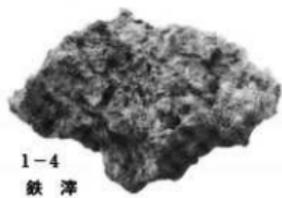
8-13



8-29

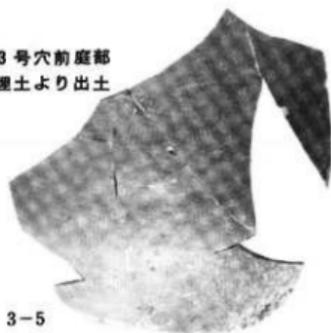


第3墳丘西裾  
出土・大壺片



尾崎横穴群第Ⅱ群 1、2、3号穴出土遺物(7)

3号穴前庭部  
埋土より出土



3-5



5-4



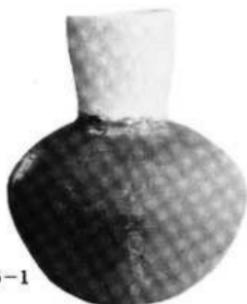
5-3



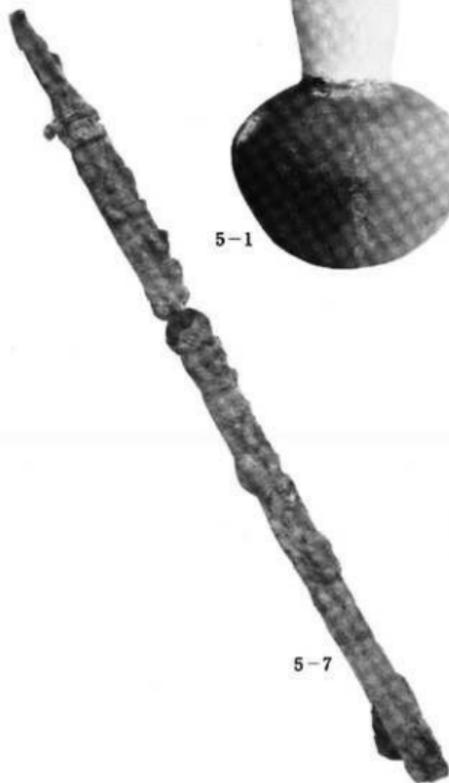
5-2



5-6



5-1



5-7



5-5

**尾崎横穴群発掘調査報告書**

発行者 島根県彦根市佐田町大字反辺  
佐田町教育委員会

昭和 63 年 1 月 25 日 印刷

昭和 63 年 1 月 30 日 発行

印刷者 島根県出雲市今市町 宇田印刷